

川柳の雑記

Pensoj flugas trans la land - limon

THE SENRYU ZASSHI

No. 460

麻生路郎追悼号

孝之



九月号



川柳雑誌改題 川柳塔創立記念句会

日時 九月六日(月)午後六時
会場 自安寺(妙見さん)
「宣伝」 西尾 榮選
各三句

南区千日前電停東スグ北側
電話 側一四七八番
席題 三 題
会費 百五十円

挨拶 中島生々庵
兼題「嘘」 後藤梅志選
「歩行者」 若本多久志選
「造花」 川村好郎選
主催 川柳塔社
大阪市南区鰻谷仲之町二〇
中島小児科

謹啓残暑尚厳しい昨今 いかがお過しでございますかお伺い申し上げます

扱 主幹麻生路郎死去の際は霊前へご厚志の數々を賜り有難く厚く御礼申しあげます お蔭をもちまして去る八月二十三日満中陰の法要を滞りなく勤めさせて頂きました

就ては早速ご返礼の儀を行います筈の処 甚だ勝手ながらご高志を大阪市立図書館 短詩文学文庫(路郎創設)へ充実費の一端として寄附させて頂く事に致しました
何卒ご諒承賜りますよう誌上を以てご挨拶申あげます

昭和四十年八月二十四日

川柳雑誌社

副主幹

遺族

北川 春 乃 巢
麻生 葭 阿 ト

檸檬(れもん)

新刊

著者 橋高薫風 著
麻生路郎 序

★れもんのように天地の純真を満身に漲らせて川柳に精進したいと願う著者が、「有情」に次いでさらに個性に磨きをかけた。10年の川柳生活を記念して世に問う自選句300句の知的な抒情は、れもんの滴りそのものである。

定価500円(送料共)
A5版 167頁

川柳集

有情

価250円
送費60円

▼著者は新進作家で、繊細な新感覚の持ち主である。川柳不朽洞会に入って揉まれ、川柳編集部員として精進を続けている前途ある好作家である。

橋高薫風子著 麻生路郎序

川柳雑誌社版

お申込は下記へ(郵券可)
大阪市北区堂島上二丁目五二
橋高薫風



お泊りは豪華で信頼できる
南海チェーンで

勝浦温泉	国際観光旅館	中の島
白浜温泉	ホテル・パシフィック	朝日
白浜温泉	国際観光旅館	鳴門
四国・鳴門	国際観光旅館	鳴門公園ホテル
四国・鳴門	鳴門公園ホテル	萬波
新和歌浦	観光旅館	紀の川苑
紀北・橋本	観光旅館	淡の輪苑
淡輪遊園	観光旅館	

お申し込みは
南海交通社

南海電車

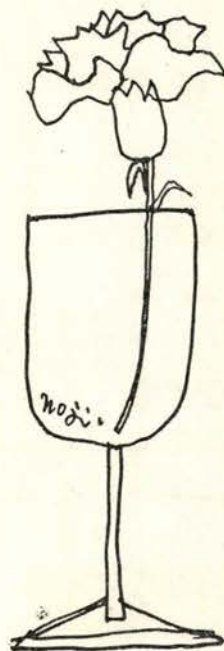
言頭卷

北川春巢

人間の値打ちは、棺を蓋うて後に分かるものである、といわれている。

路郎先生の棺を蓋うて、すでに約二カ月の月日が流れ去った。私達はいよいよ淋しさを感じている。

路郎先生のご遺言として、「川柳雑誌」は第四五九号で廃刊にするように、とのことであつたらしい。しかし、突然のご逝去のことであつたので、ご病床にありながらの雑誌の編集だと知らぬ人も多かった。従つてご逝去後、雑誌社の方へ寄せられた弔辞や弔句も、ひとしお多かった。これらをそのまま発表ができていない心地で残り惜しく、先生のご遺志に反して（ご遺族のご諒承は得たが）こ



の弔辞やら弔句、なおご葬儀の模様などを一冊の雑誌とし、大体七月末日までに来たもので、切つて、第四六〇号を発刊することに踏み切った。

先生のご辞世句に

雲の峯という手もあり　さらばさらばです

というのがある。先生は「死」に對して、隠れんぼうでもしているかの如く、やや　おどけたと思われる考え方をしておられたように私には取れるのである。

「先生の値打ちは、本巻を開いて後分るものである」と私はしゃして巻頭の辞としたい。お許し頂けるものと信じている。

寝ころべば　畳一畳ふさぐのみ

路郎

川柳雑誌★九月号目次

★柳	題字：麻生路郎・表紙：田村孝之助	(3)
★柳	巻頭言	(3)
★柳	麻生路郎先生へ	(36)
★柳	遠人路郎の片鱗	(4)
★柳	すばらしき生涯	(4)
★柳	あ、路郎君	(5)
★柳	險の師	(6)
★柳	路郎先生の思い出	(6)
★柳	君米給え俺のあとからと笑う	(7)
★柳	永遠のご安息を	(8)
★柳	思い出あれこれ	(8)
★柳	あの人は「死」を知っていた	(8)
★柳	新川柳雑誌を	(9)
★柳	座談「ありし日の思い出を語る」	(22)
★柳	岸本水府氏近況	(33)
★柳	故麻生路郎師本葬の日	(16)
★柳	路郎氏を偲んで	(25)
★柳	足跡	(30)
★柳	不朽の句碑	(29)
★柳	川柳塔発刊	(43)
★柳	噫路郎先生	(34)
★柳	柳志寸言	(42)
★柳	路郎主幹を悼む(追悼句)	(14)
★柳	悼	(7)
★柳	川柳塔	(10)
★柳	同舟近詠	(13)
★柳	近作柳	(18)
★柳	方円帖	(26)
★柳	路郎追悼句会	(44)
★柳	入門講座	(28)
★柳	一路集	(32)
★柳	「植木」	(33)
★柳	「小説」	(46)
★柳	「釣銭」	(32)
★柳	「吉田圭井堂選」	(33)
★柳	「工藤甲吉選」	(46)
★柳	「小西無鬼選」	(32)
★柳	「清水白柳」	(28)

達人路郎の片鱗

東京都 石原青電刀

「川柳雑誌」七月号がとどいた

のは、路郎先生の死を報ぜられてから数日後だから、もちろん、その編集された時は先生存命のこととおもう。しかし、その七月号の「不朽洞句帖」を読んで、ぼくは近來にない大きな感動をおぼえた。

いつのはどにかブックニンドに似てわれも

臨終が冬なら「いろは」おくりで逝かんかな

雲の峯という手もあり　さらばさらばです

その末尾の三句である。あるいは、この後で辞世の句があったかもしれないが、ぼくにはこの三句が辞世のような気がしてならない。ゆらい辞世の歌や句をものするのは、日本民族の特長であって、他民族には類がないとおもわれる。そして、古来その内容は、ほとんど例外なく、超脱的なもので、この世にみれんをのこすような執着のものはないようである。あるいはヤセガマンかもしれないが、ヤセガマンでよい。そこに日本民族の心意があるとぼく

は言いたい。

路郎先生のこの三句がたとえ意識された辞世でないとしても、実質的には、すでに死を時間の問題と観じた人の、辞世的な心情がよく現われているとおもう。そういうふうと考えて読んでみると、まさにこれは達人の達観に徹した末期のうたであり、後にのこったわれわれに「死を見ること帰するがごとし」という古東洋的な死生観を訓えられた感じがする。そうして一点の陰惨なくもあり、かげもない、底抜けの明るさをただよわせているところ、路郎先生の生涯をかけて、ここに到達されたものとして、大きな感動をおぼえるわけである。願わくばわれわれも、この境地にまで到達したいものである。

路郎先生はまた、その遺志として、先生亡き後は「川柳雑誌」を廃刊することを強く命ぜられたという。これについては、いろいろの議論や主張があるとおもうが、万説を絶ちきって「いさぎよし」の一語につけるとおもう。

かえりみれば、かつて「川柳雑誌

誌のプロを宣言し、また唯一の政治問題を取扱う雑誌としての認可を取るなど、路郎先生の敢為な拳措は、俗流川柳家の意表に出るものが多く、そわかあらぬか先生は、一般柳壇から特種の存在として白眼視されていた（戦後はそれが多少改まったようだが）。それもこれも先生の非凡な感覚のもたらしたところで、いまにいたってはただその異彩ぶりに感嘆するだけである。

ぼくは支那事変中、路郎先生旅行先の奉天で一度、戦後一昨年お宅を訪問して一度、都合二回、数時間だけしか先生の面教を受ける機会をもたなかったで、くわしいこと、デリケートな部分については知るところがないから、アツ

すばらしき生涯

どだい川柳で飯を喰う、なんて無茶な話である。それも現在のことではない。戦前三・四十年も前の話である。しかも

「川柳雑誌は同人誌とちがうで、営業雑誌やさかいなあ、」と豪語していた。何が彼をそうせしめたか。それには路郎氏の叛骨精神である。

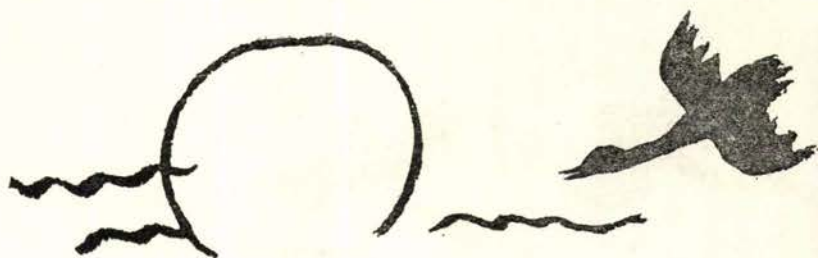
彼は、関西短詩文学連盟理事長

トサイダー的な後輩として、ながめたまま、感じたままを語るにすぎないが、ただ一つ、いまはせんなきくりごとをのべるならば、こういうことである。すなわち「路郎先生は、短詩文芸における詩人としての非凡な素質をもちながら、柳誌柳社経営のためにわざわざ、作品の上にそれを十分に発揮することができず、あたら珠玉を抱いて市井に埋没されたのではないか。」とはいえ、はじめにかかげたような名作を臨終を前にして示されたことはせめてもの会心事である。こういうと、さだめし地下にあって路郎先生「ナニをぬかす」と阿々大笑されることだろう。

西宮市 堀口塊人

の職を固守した。それは個人的野心であるかのように見られた。しかし、川柳が、短歌、俳句、詩と同列に、社会的地位を得ることは、ある時代の川柳人の悲願ではなかったであろうか。連盟はその夢を実現し、さらにそれを拡大しようとする運動の一つであった。しかし、柳界では、路郎氏の理想を理解する力に乏しかった。彼の





叛骨精神があまりにも、世に先んじていたからである。従って短詩文学専門の図書館建設の如きも、はかばかしく進展しなかった。

川柳界にはいろいろ新しい運動が行われている。しかし、前衛俳句の後塵を拝しながら、川柳の枠内をのみ出し得なかったり、川柳の伝統を否定しながら、伝統吟社同人の地位を去り得なかったり、いずれもコップの中の嵐にすぎない。然るに、路郎氏の眼はいつても川柳の外に向けられていた。彼の叛骨精神にとつて、川柳界はあまりにも狹すぎたのである。

堺に建てる、食満南北句碑の、作品選定委員として、ある日ある時、会合したことがあった。二、三人の人名を忘れたが、路郎、水府のお二人に私も混っていた。席上、路郎氏が熱心に推薦されたのは悪人が栄えたまゝで初日果て

南北

の一句であった。作品としては面白かったが、悪人、と云う文字を句碑に刻むことに、常識的な抵抗を感じたので他の委員はこれに反対した。結果は、多数決によって否定されたけれども、路郎氏は「作品としてよければ、それでよいではないか。」と云ふ主張を断じて曲げなかった。私は彼の叛骨

精神のきびしさをひし／＼と感じた。

路郎氏の南北氏に対する呻吟は宿替も今度は番地無ところ

路郎

であった。これは、その人を知り、いのちある一句、として当時

ああ路郎君

大阪市 岸 本 水 府

「君も病院、僕も入院した。お互いに早くなおるよう」と、はがきを出した。とたんに訃報が届いた。全く胸を打たれた。

路郎君と僕とは、明治四十三年夏の関西川柳家の句会から交際がはじまった。

一緒に当百翁の家でご馳走になつて大いに川柳を語つたこと、青明君の家に半文銭、五葉らと毎晩のように逢つて川柳の革新を叫んだことも忘れられない。

そのころから君は一本気で、川柳の主義主張はしっかりしていた。

川柳雑誌社をおこすまでは、日車君らと新興川柳の旗をかかげて五六年は誌上で議論も多かった。川柳になつてからは、同じ川柳の（新興臭のない）傾向だったの

の人々を感銘せしめた。そして彼氏もまた、今となっては、その番地の無いところへ行つてしまった。

川柳雑誌四百六十号の果積は麻生路郎先生叛骨の金文字塔であり川柳によって一貫されたすばらしい人生記録と云うべきであらう。

で、コンビとなった、丑人、緑雨、芦穂君もよろこび、よい団体が大阪に出来て、まことににぎやかな大阪柳界となった。

路郎君を思い出そうとすると、どうしてもお互いのハタチ代が頭にうかんできて、若々しい気になるので愉快である。路郎君と半文銭君と僕の三人が関西線の堤防に立つて、暮れて行く南大阪の詩のような情景をよろこんだり、箕面の夕立に逢つたり、僕と二人、君の家で徹夜して、十五銭の肉鍋を一つずつ取つて「足百句」をつくったり、なかなかのウマ合ひだった。

寄席で即席話をする落語家の「何かお題を拝借」といった時、客はハンカチや新聞や、たばこを出したが、その時「僕自身を題に

してくれ」と高座へ上つたのには驚いた。

私にとってよき友人であった。

古本屋をしていた時、私の盗まれた川柳の本を見つけてくれた。

川柳誌の主筆として、すべてにそなわつた力は立派、句風も新鮮演説をしても、字を書いても人後に落ちない。それに編集が実にうまい。企画もよい。菊版の雑誌を一躍大型にした、川柳誌としての創意は、常に新味を出そうとした心のあらわれであった。

川柳界でよく働いた。この週の東京の周魚君のお祝いの会で逢つたら、大に語り会つつもりでいた。

柳界の巨星をうしなつたこと、特に大阪の団体に君のリードの姿を見ることが出来なくなったのは淋しい。

切に冥福を祈る。

車

福壽司

心斎橋筋大丸前

電話四三三四番

晩の師

——もう一度会いたかった——

東京都 高須 啞 三 味

君見たまへ蒔稜草がのびてゐる
路 郎

この半折が、何年ボクの家の床の間に、ついていたか？ ボクが芝から蒲田へ移転し、蒲田から大連へ渡ってからも、ボクはこの半折が好きで、ずっと床の間へかけておいた。——それほど、ボクと路郎師との関係は、永く深いのである。

大正末期から昭和初期へかけて、何年間か、ボクは路郎師の切望するまゝに、川柳雑誌社東京支社のようなものを引き受けて、毎月の「川柳雑誌」を、東京の目ぼしい書店へ配って歩いた、ことがあった。

その頃のある年、全国川柳大会が、東京で開催されたことがある。その会のあと、ボクは路郎師と「みちのく」の小林不浪人君とを、大森のカニ料理に招待し、二次会を上野池の端に移して、大いに歓談したが、この不浪人君と路郎師の交遊が、それから非常に緊密になったことは、ボクの大好きな二人のために、非常に嬉しく思ったことであり、それを機に、路

郎師は幾度か、青森へ招かれたのであるが、その行き帰りに、必ず東京へ一度寄って、ボクとの一日をすごすのが、路郎師の旅程となっていた。

去る昭和三十七年であったか、不浪人亡き後の青森へ、路郎師が招かれた時は、路郎師が随行者二人をつれていたので、ボクの家を宿にしては貰えなかったが、ボクはその帰路を擁して一夕歓迎の小宴をはり、心から大連以来の久闊を叙した。ところが、その一カ月ぐらいい後、新潟の句会へ出席されることになった路郎師は、こんどは一人で行くから、宿を頼むというので、行きも帰りも、ボクの家を宿として、合計四日か五日、ボクの家についてくれたが、その時の御様子では、食欲が余りないほか、多少歩行の不自由らしい点を除いては、別段健康の悪いなどということには気がつかなかった。

その後で、ボクらの古川柳研究の輪講が、「川柳雑誌」に連載されることになり、その原稿の責任をボクが持つことになってから、ボクと路郎師の間は、また急に交

渉が多くなり、路郎師に会う度に、師は

「君が、もう少し近くに住んでいたらなあ」

「また昔のように、ウチの東京支社を、君のところに置いてくれないかなア」

などと言われたことが、何度あったろうか？ その度に、ボクは隻手の身の不自由さを強調して、師の期待に反いて来たが、

「まあ、それでは仕方ないから、君はウチの特別寄稿家ということに、ウチのスペースをいつでも自由に、君の勝手に使ってくれよ」と、師は淡い顔をして、ボクの身勝手を許してくれたが、何という深い知遇であったことかと、ボクは今にして、涙ながらに、師と会ったこと、師の言ったことを、それからそれへと反芻して、勿体なく思い出しているのである。本当に、もう一度会いたかった、と切に思う。

先に「大連以来」と書いたが、ボクが大連へ渡った翌年か、路郎師は、北支派遣の皇軍慰問に行く途次を、大連に寄られた。その時、一晩泊まって、翌日北支へ行かれる埠頭へ、師を見送ったボクが、

「それでは、お元気で行ってらっしゃい、お帰りにまたどうぞ」

と叫びながら、素手を振っているのを見られた師は、

「こういう所に住んでいたら、こういう送迎をする機会も多からう。用意のために、これを持っていたまえ」

と言って、船の甲板から、埠頭にいるボクの足許へ、ボイと投げつけられたのが、ボケット用日章旗（折りた、み式日の丸）とでもいうべき、手布ぐらゐの国旗が、差し込み式の軽金属の柄に取りつけてあるものであった。それから後、ボクはその手旗を持つて、幾人の人を送り迎えたことであらう？ 思えばそれも昨日のことのように、懐かしう思い出される。……あれもこれも、今は涙の

路郎先生の思い出

熊本市 大 嶋 壽 明

明治四十年以来、約四十年の長い間満洲で生活した私は、その間満洲を訪れた文人墨客の殆どの人にお会いし、俳句会、短歌会、座談会などの歓迎会には必ず出席し、又これ等の人々に対しては、出来る限りのお世話や案内などをしたのであった。

路郎先生とは大正十一年上阪の節、お宅にお訪ねしてから爾來御

晩に浮かぶ亡き師の佛でしかない。嗚呼！
暇閑すればつい其所にある師の面輪



ことを承認して呉れぬ、已むなく友人満日新聞記者の本田磯花君に頼んで、同君の名義でバスを貰い路郎先生に送った。

先生は朝鮮經由で満洲に來られたが、国境の安東税関で所持品の検査があり、その姓が麻生とあるので安東警察に連絡され、嚴重な取調べがあったそうである。その頃日本では社会主義者の取締が厳しく、当時の社会主義者の大物級に麻生久という人があり、常に私服警官が尾行する程の要注意人物であった。安東の警察でも先生の姓が麻生なので神経を失らせて所持品は勿論身体検査まで行ったそうである。夫れが為本田名義のバスを発見され、別段迷惑はなかったが、折角のバスの使用が不能となった、との事であった。

今日では社会主義であろうと、

共產主義であろうと、何等憚る所はないが、その頃の政府は社会主義（共產主義は表面に出ていなかった）をひどく恐れ、強力な弾圧取締りをやつて居った。今から考えると可笑しくもあり、夢物語りでもある。

この私の小さな好意、言い換ゆれば鉄道バスなど余計なおせっかいであり、それが為先生の旅程を何程か手間取らせたことを恐縮すると共に、私としては忘れ得ぬ思い出の一つでもある。

昨年十月だったか、路郎先生は熊本大学名誉教授田中辰二先生の病床を見舞われ「お互に病弱だが何とか健康を保ち、どちらが長く生き得るかを競争しよう」など笑話を交わされた由を耳にした。折角はるばる熊本に駕を枉げられたのに、私は夫れを知らず、あとで

前田喜代人

胸のとに手を組み寝ねて充りの

來れる夜よ君の計を知る

湯室月村

急に淋し大輪のばらの崩れ

和田稚草

今日よりはハタと鳴き止む夏鶯

「旅程が急ぐので失礼する薄明君によろしく」と言い残され、飛行機で諫早市に向われたそうで、あたら面会の好機を逸し実に遺憾に堪えない。これ計りが残念でならぬ。

君來給え俺のあとからと笑う

西宮市 梶本 紋太

七月十八日。今、路郎師の告別式が静かに行われている時刻である。

私は、四年前のちょうど今頃、脳溢血で、一時死は免かれたものの、それ以来外出の見込みももなく、今まで十数回あった柳友の慶弔行事にも、やむなく欠礼が続いた。今日もまた出られぬまま遠くその場を偲ぶのみ。

六月の初め来訪のK氏の話に、退院後の路郎氏の容体を承って、少しの不安におそわれたが、今までたびたびそうであったように、氏の旺盛な氣力で回復されることを期待し、それからの毎日は、私の頭から離れなかった。その後誰れに問う機会もなく、会う人もないまま寧ろ音のない方がよいのだと、思つてみた。りした。

そうした毎日であったが、七月十一日、北川副主幹から直接の通知を受けた。それによつて、今の

茲に謹みて先生の偉大な功績を偲びつゝ、心から御冥福を祈念するものであります。

今までひたすら輕快を願うていた路郎氏は、すでに四日前に逝去せられていたことを知った。今までこうした時、新聞で知るとか、いち早く誰かの私信で知らされるのが例であったが、今度は少しも気づかずいた。それだけに私は、案外冷静に先輩の死を知ることとなり、ただ溜息のみを吐き続けた。

その日、私は謹悼の意を表してすぐ短文を書き、ふあうすと編集部へ送った。しかし、私は書くに言葉が出なかつた。それで、言葉がないという意味と、故人の思い出は改めてゆつくり書くことと約束したあとへ、川柳雑誌発行が腹乃夫人と不朽洞会とで、今後、隆昌に続けられることを祈るとつけ加えた。これが私の願いである。

その翌々日再び通知があり、故人の遺志に従つて雑誌は次号限りで終刊することを知った。私はずつと考へた。予想外のことなの

で、それが路郎氏らしい決断であると頷くまでに、少し時間がかった。そして生命力さえあれば新しい芽が吹き伸びてゆく、それらに自由の天地を与える、そういう見地からの決断ではないかと、ひそかに愚考して首をふった。この上はそうあつて欲しいと願うのみである。

私のはたちの年から五十五年間、私の頭にとどまりつづけた路郎の名とその人格、川柳雑誌創刊以来、四十数年に亘る月々年々の進展ぶりと共に、随分、教わり学ぶこと多く私の生涯に、かなり指針として影響したことはいうべ



ココロ
便箋



くもない。私は心から故人に礼を述べ、今日のお別れの式に思いをはせ、身にしみて味わうものである。

朝からの曇り空で時々小雨する

永遠のご安息を

神戸市 三条 東洋樹

数年前、路郎先生が大患に罹られた時、お年がただけに、私は「死」という暗いものをフツ思いついて懐然とした。若し路郎先生が亡くなられたら……考えただけでも日本柳界の寂寥が身に沁みる思いだった。

今の内に大阪へも寄せて頂き親しく聲援に接して置かねば、悔いを千載に遺すだろう……と、その時痛切に感じながらも、その後先生が精神力で奇蹟的にも回復されると、安堵と共に私のこの決意は薄らぎ、再びご無沙汰の日が続いた。そして今日、突然路郎先生が去るの新聞記事を見て、改めて痛恨やるかたなき心情を味わうとは、何たる悲しさであろうか。

路郎先生は日本柳界五大家の中でも最長老の、謂わば人間国宝ともいふべき人。齒に衣を着せず直言する人であったから、一部からは敬遠されていた面もあったかも知れない。

今日、この一週間の私の心持を記して投稿することにした。せめて一思いもせぬことではあったが、終刊号まで同行出来たことを感謝する。

合掌

知らないが、私は昔から先生の言説には一〇〇パーセント傾倒し、教えられるものを深く感じていた。

柳誌にいち早く第三種郵便の認可を取り、月刊を厳守確約した川柳初期の功績。

率先してプロ作家を表明し、川柳の地位の向上に尽力された事。先見性のある雑誌の編集方針……等々余人では為し得ぬ多くの事を、先生は為しとげられたが、まだ日本の短詩界に今後為そうとする大きな抱負を抱かれて居た筈だ。

私は不朽洞の会員でなかったから、直接薫陶を受ける機会には恵まれなかったけれども、生涯の数少ない出会いの中で、いつもその言説の中から、教えられるものを受取っていた。私は「ふあうすと」「時の川柳」と歩いて来た者で、先生とは所屬を異にして居た

が、影響力という点では路郎先生こそ最大の師であったかも知れない。

戦時中、日本軍が支那大陸に攻め入って苦勞した如く、今またアメリカがベトナムに派兵して、抜き差しならぬ泥沼の苦勞を味わって居る如く、路郎先生も柳界という泥沼に飛込んで、正義や聰明で解決出来ぬ苦勞をご家族と共に味わわれた事と思う。自己の後継者を儲かえることを、二十年も前からそれを考えて居られながら、遂に実現しなかった事だけが、先生の心残りではなかっただろうか。

川柳雑誌がこの八月号を以って終刊号とすると聞いて、私は長い間の麻生家の苦勞と犠牲が、今更のように眼に浮かぶ心地がする。雑誌の長い歴史を思う時、惜しい気もするが、反面これでいいのだと思う。臨終に近く、口開けて軀をかいている時でさえ、頭の中は枕元のラジオを聞いている程、絶えず酷使されて来た先生の神経は、これでこそ安息を得られるのだと思う。

「休ませてあげたい」と恐らく、家族の人々は思われた事だろう。私はこの決定に深く同意しながら、改めて涙の落ちるのを禁じ得なかった。

思い出あれこれ

京都市 布部 幸男

さあもう二十年も以前のことになる。大阪の川柳句会（それが川柳雑誌の会だったかそれ以前の会だったか、おそらく川柳のはじめの会だろう）のあとのことだった。道頓堀の万よし（これも川柳雑誌関係の万よし氏経営の小料理店）で死んだ池田柳舟と二人で盃中柳談に「大阪の会」のあれこれを論じているとき、柳人にとりま

かれて麻生路郎先生ご来臨という空気。お互いやアやアと交情こまやかなムードが展開されたことはいうまでもなかったが、こっち二人は京都の若輩、気鋭当るべからずという時代のことだから、いつの間にか酒中に花が咲いて路郎・柳舟のあげつらいの幕になってしまった。なんでも「京はのんびりすぎる、牛のような松窓云々」からはじまった京阪柳界の比較論の延長展開らしかったように覚えていた。何かのはずみに盃が飛んだか落ちたか、鋭角のありすぎたご両人のすさまじい舌の戦いに急ぎ中にわけいった格好の好青年が現在の神戸、梶元紋太さん。あとはそれこそ京阪神仲よく「万よし句

趣味の
きもの

福 呉服店

高橋 操子

岸和田市野田町一七五
TEL岸貝局②六六三一

ろのチャンスに同席したが、いつもこの第一印象の路郎さんの潤達ぶりに圧倒された。あやめ池の公開会のある茶屋での一升瓶での献酬に見たその人間味は、ついでこの間京の天ぶら屋川柳人の「木戸」の二階で盆を交わしたときまで不易不変であり、手紙やはきに見る字体の正しさ美しさが老来ますます人間性の円熟を示してきただと思っていた。

私は路郎さんに限らず誰れにでも「水くさい川柳人」らしいが、心のつながりはいつもしっかり起伏を越えてつづけていたつもりでいる。

路郎さん埋める墳輪は十七字そんな句を作り私の心の霊前へすぐに供えておいたが、その後「川柳」の終刊追悼号のことを知り、私は哀しい合点にうなずいた。

七月十六日の川雑京都支部の例会はしめやかに師に殉じてピリオドを打ちたいという田中鳥雀さんのあいさつにみんな声をのんだが、私はたとえ支部の名は消えたにしても、路郎さんの忌日を中心にして、「路郎忌」をつづけて欲しいといった。幸いみんな了承されたようだったのでうれしかった。

今は空虚。日が経つにつれて「路郎さんの亡き」わびしさ哀しさ虚脱感がひろがってゆくことであらう。ご冥福を祈ります

あの人は「死」を知っていた

—— 老いたる友よさらばさらばですとは涙 ——

東京都 川上三太郎

「先生、大阪の麻生先生が——」
けた、ましい門生のKの電話に思わずこっちもあせった。

「何だと」

然しやっぱりそうだった。麻生さんは死んだ。私は卓上の受話器を手にしたまま、暫し呆乎とした。

「やっぱり、やっぱり」

こうと知ったら四月か五月に西下してあの人を見舞うべきであった。然しあの人々の雑誌にあの人の病気が多忙かのどちらかが書かれてない月はなかった。柳に風で——まずく、今月も、それが三月、半年、一年とこのところあの人に会っていない。それどころか私はあの人から私がJ大学附属病院に入院中二度も見舞われてゐるのであった。そう思って考えてみるとあの方は自分の病気を棚に上げて、ひとの病気となるとよく案じて「雑誌」に私の病気の事にも二三度触れていた。すまない。

路郎さんと私の交遊は大正の初期からだから、五十年以上になる。吉川英治だの私たちが東京でいまの川柳はどうにかしなくて

はならぬ」と当時の先輩の作品がまだるっこく若さのまゝ、に起ち上がった時、関西でこれに應じて若しくはあちらが起ち上ったので東京のわれ／＼が相呼応したのか、とにかく東西で心を一つにして作品行動に奔走したのだった。その西の一人にあの人がゐてくれた。

いやむしろリーダー格であった。当時心身ともに馬のような私は爾来たび／＼西下した。西下すれば必ず彼の家を訪れた。岸の里、文、

酒

清



灘・魚崎

金露酒造株式会社釀

里、天下茶屋とそんな土地の名が思いだされる。二人はしば／＼夜を徹した。一升瓶の数が殖えてい

く。彼の門生が誰かしらいつともた。そうして私たちの談論と共に風発した。乱歌、万よし、かはる等、等々——。それが昭和の初期まで続いた。だが一年のうち三回が二回になり一回、時には一年中相会わずに過ぎた年もある。いま思えば残念でもあり口惜しい。友には会っておくべきである。

「川柳雑誌」の本年七月号の「不朽洞句帖」には参った。六句とも秀抜であり心いたましく哀しく自らを傷つけた。中でも雲の峰という手もありさらばさらばです

新川柳雑誌を

長野県 中島紫痴郎

思い出せば昭和三十四年九月四日に御夫婦でお出かけ下さって、四日間御滞在なされた。その間、御退くつをまぎらす運動にと、植木に水やりをお願いしたところが、お帰りに際し

如露にも今日が別れか無心庵 葎乃

と色紙に書きのこされてあった。其後先生にはお体が悪く聞きましたから御静養にお出かけくださいませと申し上げてもお出かけがなかったが、入院、退院後病状も薄紙をはぐよう快方に向って七十七の誕生日を迎えられると社報があったので安心して居たのであった。

氏、が川柳を職業とされるとの宣

言をなさった時に柳界ではひとしく、間もなく取り消されるだろうと思って居られたのに頑張りつづけて、四十年七月、四十八号に川柳の最も機敏ある雑誌と高唱されて居たものを八月号を幾刊号とせよと遺言されて亡くなられ、期その信ある川柳生活の了りを告げられた信念は、ひたすらに感じられたが、剣花坊氏の川柳人誌に倣い、葎乃未亡人を、後進の人々に抱って押し立て、更に時代に適応する、新進の雑誌となし、故人の意気をついで川柳の為御努力あらん事を心から八十四才の老人がお願いする次第であります。

(原稿到着順)



麻生 葭乃選

加賀市 野村 味平

もぐりでも炙で先生と呼ばすなり

駈け落ちへ縁も燃えて恋も燃え

適格な推理と信じたなら路み

米子市 小西 雄々

路郎先生をしのんで

鼓膜には披露の音がまだ残り

保険屋になった恩師へ義理をたて

鼻緒にも女心は気をつかい

大阪市 山川 阿茶

旅したつもりつもりと服作り

暑うても不足涼しうても不足

加賀市 那谷 光郎

新婚へ女夫湯呑みの旅土産

磁気バンド効かず酒量が減るなげき

鮎釣りのポケットたばこ銭が鳴り

大阪市 福井 野迷路

菊作り鉢は人手で上げ下ろし

これマイク何が遺族へ感想だ

医者坊主葬儀屋と作業流れゆく

奈良県 麻生 アイト

棲みよけりや僕もゆくよお父さん

スローモーが早めに替える巻線香

大阪市 市場 役食子

内孫が出来るお腹で嫁が来る

批評乞うメモを挿んで本をくれ

三年ぶりで弟に会いに靖国社

また来てよバイ／＼をして送られる

伊豆山温泉にて

気前よく最後の宿で呑めと妻

大阪府 川村 好郎

冷房どころか貸付へ食い下り

アベックに負けず蛍も露に濡れ

もらいかけ常着で来たを嬉しがり

どんじりまでねばり女給にふられてい

堺市 吉田 圭井堂

目的を外らせた雨のターミナル

家を問う振りで娘が下見され

まだ生きる気か万歩だの弓だのと

効き目見ぬ裡に転動袖の下

道成寺阿呆くさそうに聞く女性

一びきの蜂が運転禍まらせ

転んでも起きぬ癖が役に立ち

防府市 長野 井蛙

くやしさに耐えた涙が堰を切り

根無し草風に任せた岸で咲き

岡山県 直原 七面山

故郷の森に販えって毒を飲み

二号貞節出所の日をば待ち焦れ

入試地獄を切り抜けて来て山で近き

ご近所に不幸ステレオかけとれず

見送りの方も拳で拭く涙

鳥取市 河村 日満

推せん候補落つ

簡単に次点感謝の辞を結び

汚職への怒りきびしい票となり

唐島の司会党派を超えてほめ

倉敷市 田垣 方大

妻も娘も黙ってしもた師の計報

師の計報とうとう絶句してしまい

太陽がかけたように師の計報



七十七骨の白さを横たえて

揮毫の筆を洗う日の遂に来ず

戻り梅雨戻らぬ人へ香華たく

遺言のただ一言が物足らず

寝返りさせた背中への堅き掌に残り

岡山県 浜田 久米雄

総入れ歯老化というに突き当り

一日を無為に過ごした宵を悔い

仕事着は夢中夕餉へまた呼ばれ

大阪市 水谷 竹莊

大文字見るのも京の夕涼み

その他大ぜいで出ても矢張り初舞台

誘惑を仲居笑って受け流し

次々と古寺はめる京のバス

旅行好きプランたてすぎまた迷い

広島県 弘津 柳慶

待合室寝てるルンペンさけて掛け

写真班さけて収賄連行し

速達はSOSの子の便り

京都市 大鶴 喜由

福寿草離れともない松が枯れ

かささぎの橋へ一足先に発ち

仏の坐今も微笑むプロマイド

柳友はあの世にもいる気の安さ

川柳が路郎を閑居させぬまま

今日に限って灸をせなんだ気が残り

奈良県 西辻 竹青

かんにんと云う麗しきものあるに

AAG会議つぼみのままでしなびてる

盗泉の水は飲まずと見栄を切り

岡山市 服部 十九平

母も娘も借着で招待席につき

風紋が砂丘を印画の題にする

西宮市 若林 草右

梅雨空へ傘一本がもめている

なれあいのストは会社を食いつぶし

とれぬ政権見越したようなスローガン

落選も履歴に書いて立候補

岡山県 田村 藤波

敵になり味方になって同業者

迎え火に来ませ硫黄島の亡父

往診の車を見付けて来た見舞

児島市 本田 恵二郎

あげ底のような公約聞かされる

雨男柄が抜けるほど傘をさし

敵ながら天晴れなどと負け惜しみ

堺市 高崎 雄声

ガイドの苦勞歌手の真似までせにやならず

倉敷市 野田 素身郎

前社長令嬢の妻が今は邪魔

田舎が田舎がと自分も田舎出のくせに

退社前時計横目にタイプ打ち

アルバイト男のいやらしさも覚え

青屋市 丸川 初甫

盃を交したんびにメッキ剥げ

風菜を檢札に来る一等車

鼻先で酌がれ見直す餐の艶

岡山県 池田 古心

先祖からあると刃剣赤いわし

大阪府 早川 清生

最高です夫の文学論も唄も

地球病みネオンいよいよ多彩なり

われも庶民勘で判断する政治

苦しみ抜いた半生がカルテの一行

大阪市 西出 一栄

白溪をよろこぶ老母へ湯が溢れ

瀬戸の海もやのボールをかぶる島

クラス会夫ののろけや棚おろし

大阪市 橘 高薫風



褒められた思い出がなし師を葬送る

老詩人ひとり渉らす天の川

初盆の胡瓜の馬は師に似たり

落はるか近づきただけ遠のく師

神戸市 仲 どんたく

キャバレーのはいそれまでと云う恋路

黒棒に去年は弔辞読みし人

下ごえか匂うていても坪二万

平田市 久家代仕男

老師を悼む

師の句集供え手向けの香を折り

学問をさせて老後を邪魔がられ

出雲市 原 独 仙

値上りを叱られている御用聞

海はよし恥ぢらいいもなく皆裸

平泳ぎ背泳ぎ孫に見直され

新潟県 高野 不二

上底でもいいさいさい良い土産

同乗の勇氣は出ない初免許

愛媛県 村上 旭 童

自家用車さてゆくともなかりけり

金魚屋の桶で死なないのに死んだ

大阪市 仲谷 ハナ子

チグハグな服装目立ち夏は来ぬ

血統書付仔猫忽ち買手あり

日記帖はや六月を迎へたり

大阪市 河井 庸 祐

無惨にも一が並んだ通知票

わが子しか目に写らない参観日

大阪府 谷 沢 好 祐

オンボロ車なかの品物だけ盗られ

大量生産歌手も消耗品となり

愛知県 横 紫 光

上役の誤字を直せば氣に入らず

螢の光バーは追い出すようにかけ

恋人をゆずる悲しい嘘をつき

青森市 工藤 甲 吉

ビャガーデンオールドミスに誘われる

鍵ッ子がしばし見とれる茜雲

ベトナムの人を思うて蚊帳に寝る

大阪市 今 西 章 雅

文鳥は徒食家籠に馴れ逃げず

事前運動標語と距離のある選挙

京都市 室井 八九 寸

冬いちごむさぼり物価高嘆き

黙禱ヘカメラカメラの不法な

長い眼でみているうちに首相やめ

撮つされる茶摘み冠りをサラにかえ

岡山県 横山 一声

墓参りより外に故郷へ用もなく

泳がずに妻の水着ばかり撮り

小松市 関戸 宗 太郎

ブラモデル部品余ったまま飾り

全国区一番楽な字を探し

水枕陰干にして母帰

トレパンを脱ぐ太ももは桜色

美称市 安平 次 弘道

公約の無理を候補も知つて云い

どうせだめだと女は墮ちて行き

初釜へ衣装くらべの娘もまじり

自家用車女たらしの武器になり

宇部市 平田 実 男

流行の水着着ていた溺死体

名刺見て受付言葉まで変り

またチビを宿のゆかたが意識させ

ボーナスは赤字を埋めただけで消え

夏の女僕を痴漢にさせる気が

諫早市 川岡 霊 眼子

チェックの地図さえ消さず逝き給い

先生の時計遂に二ツ共止つた

吉展事件の父母を想う

花嵐噫一陣の夢の間よ



永遠の別れと知らず水テッポー

フラッシュはいつもハンカチだけの顔

青森県 木村 凉人

小商い日歩三銭を借り惜しみ

ポケットの数に戸惑う三ツ揃い

デコボコ道一度宮様こんかいな

大阪府 唐崎 専翁

極楽も喜寿指命か七・七日

兵庫県 遠山 可住

アベックに駒犬全く無視されて

値の合わぬきうりぶらぶらさがり

地下鉄を出て夕立ちがあつたんか

兵庫県 河原みのる

人形になり切ることのむつかしさ

クーラーもあります農家嫁探し

老人クラブ東条ダム旅行

妹背岩心中の名所までこさえ

鳥取県 清水 一保

早乙女の話題もいつか物価高

支柱では不足朝顔軒へ伸び

海山に親が疲れる夏休み

片書が浴衣になってやっと取れ

出雲市 中川 晃男

師 近 く

死出の旅文楽の手にあやつられ

松江市 柳 楽 鶴丸

採用取消あゝ大学は出たけれど

知らぬが仏殺人犯とすれ違い

兵庫県 大江 秋月

荷物車に詰められローカルラッシュゆく

駅のトイレだけを使ってバスの客

公休の刑事にスリがひっかかり

大阪府 松田 半月

手術室廊下でつきそいまご／＼し

今治市 越智 一水

師の死を悼む

誤報ではない新聞へ目がくらみ

アルバムは笑っているよ師も僕も

風鈴も沈黙する淋しい日

今治へ行くよの約束師はやぶり

七夕が憎し先生を奪い去り

竹原市 山内 静水

竜宮へつづいていそう魚が見え

スタイルは満点借り着で撮るポーズ

趣味多忙お花はバケツにつけたまま

新居浜市 小林 孝正

傷痕の深き日記も閉じたまま

好いてはならぬ人と知りつゝ歩巾合い

大阪市 賀 本 昇

一生を恩に被ますと借り上手

へボ将棋助言同士が絶えずもめ

板囲いまだまだ上がる土地ブーム

富田林市 吉岡 美房

栄転の噂うれしく否定する

慰労会次の仕事のハッパかけ

諫早市 島田 破竹

クルマ今日置いて来たぞと呑める口

同 舟 近 詠

松山市 月原 宵明

忘れるであろう蝙蝠^{こうもり}忘れてき

悼路郎先生

死はやらぐなどと暗示の如く近く

待ち呆け駅夫の如露に又追われ

軽犯にならぬ程度の海水着

須坂市 高峰 柳児

ガム噛んで逢ってる恋のまだ素直

血圧の話を猪口をさしてきき

はなれゆく味方へ頑固まだ捨てず

メガホンで八百屋団地に顔が売れ

ドックから社長禁煙して戻り

路郎主幹を悼む



浄土への路やすらげく句の命
 險閉すればつい其所にある師の面輪
 大いなる足跡巨星光り引く
 たとふれば巨木仆れし空の青
 幽界で麻生路郎の喜寿の宴

路郎冠者を哭す

やるまいぞ／＼とて泣くばかり
 迎え火にまざまざとある惜しき顔
 散歩してはるやろ火星のあたりまで
 いろはおくりとは路郎さんの還元
 伸びきったホーレン草の中なる君
 趣味かたる友また逝きて夜の雨
 七夕に忘れてならぬ忌日あり
 川柳一とすじ六十年の旅終る
 浄土への今宵の道の明るすぎ
 川柳のなかにのこれるみをつくし
 冥土まで遠いと思う月へ来て
 花八万四千大きな一つ萎れる
 これでよい人生は無し梅雨重し
 初句会連のうてなに座がきまり

村田 周魚
 高須啞三味
 大嶋 濤明
 近江 砂人
 富士野鞍馬

山路 閑古
 榎田 竹林
 堀口 塊人
 布部 幸男
 堀 豊次
 高橋 月南
 平賀 紅寿
 金泉 万案
 鈴木 青柳
 深野 吾水
 海士 天樹
 正木 竜樹
 斉藤丹三郎
 丹波仲字呂

巨星地に墜つ浪花の空は今日も雨
 果てしない西へとほととほ一人旅

川柳雑誌創刊以来四十三年間

思い出を打ち切れぬ程たんと持ち
 落葉の季節ならねど巨匠散る
 六文をもううて旅の気のかるさ
 南無不朽洞とはよきなづけかな
 昨日の不連続線へ哀しい青空となつて
 香煙の真直に昇り迷いなし
 夏空に花火消えさり師やいずこ
 悲しさの極み感情が句に乗らず
 座り直して置き去りに堪え
 師の影はみえず雲がゆく
 遂に引く潮見送りて蟹の群
 今ぞ知る阿りのすさびの戒を
 惜しまれつその人は近く別な路
 酒とろりとろりと連に昏れかかり
 悲しみの雨なら降れよ夜もすがら
 暗闇の道の灯りが今日は消え
 頑張れと鞭うつ音がまだきこえ

長谷川鮮山
 橋本 緑雨

同
 三宅 ろ亭
 塩路 吉丁
 所 ゆきら
 橋本 白史
 青柳三四郎
 渡辺 極堂
 大鶴 喜由
 平岩 司郎
 岡島 禎一
 田中 烏雀
 里田一十
 松尾きい知
 永田六竜子
 木村 草々
 江国 幽谷
 光好 陽子

路郎主幹を悼む



在りし日の面影のみぞ泛ぶ
 川柳の鬼いまはなし梅雨つづく
 新聞の切抜きをして師を悼む
 師の声録音にしか聞けず嗚呼
 大空へあれよあれよの雲の峯
 天の川先生の誕生日はもうこない
 凡聖一如冥土へは同じ道
 今頃はえんまや鬼を煙に巻き
 三途の川も手をひく弟子が待つてゐる
 天国で会えると思ひ師を送り
 胸底の孤独に気づく師の偉大
 七夕の風に誘われ恩師逝く
 逝きし師の浴衣姿がなつかしい
 後世に残す名句は俺に似よ
 先生の童顔今も眼に残り
 輝ける柳の巨星今ぞ消え
 きびしさをきらと眼鏡に麻生路郎
 先生は生きてはゐるつまでも心の中に
 天の川こよいの句座へ師を招き
 訃報聞きベタルも重く梅雨の夜
 シャンデリヤ消えた如くに恩師逝く
 星の逢う夜を柳翁と逢ひ給ひ

後藤 梅志
 長谷川三司
 浜田久米雄
 高崎 雄声
 福井野迷路
 正本 水客
 金井 文秋
 西田柳宏子
 西出 一栄
 城 一舟
 宮西 弥生
 賀本 昇
 佐和志津子
 藪 市郎
 本庄 金三
 谷本鈍愚坊
 山田松太朗
 宮尾あいき
 高木 桃里
 松本 忠三
 佐内 隆文
 木山 遠二

巨星墜つ浴衣まつりを前にして
 ビューティの熟れ落つ庭に訃報聞
 巨樹倒れすきまを塞ぐすべもなく
 柳壇の巨星浪花の空に落ち
 輝ける星も夜明けと共に去る
 不朽洞句帖静かに閉ざされる
 焼香の順へいたらぬ弟子でした
 寂しきは師の思い出にふける日日
 いつの日か師の影を見ん天の川
 名木の柳は枯れて名は朽ちず
 お別れを惜しむ孫弟子ひ孫弟子
 さらばさらばと師のこえが^{あり}雲の峰
 礼智信僕の心の奥座敷
 君情熱だよと恩師のみ声する
 謹んで恩師を偲ぶ句座に就く
 大空の星の一つと師をしのぶ
 雲の峰へ蟬抜け殻となっている
 長い間のつきあいでした私にも
 七夕の日を路郎忌として永遠に
 愛情の鞭の傷跡抱きしめる
 俺に似よその情熱を我つが

出原 真奇
 高木 洩柿
 木山 二路
 木山桃仙坊
 梶 友鬼
 竹内 李朋
 伊藤 茶仏
 藤井 明朗
 川口 弘生
 泉 文夫
 横山 一声
 西川 晃
 大野木真砂
 山内 静水
 賀本 昇
 藤岡 花梢
 樋口 舟遊
 八木摩太郎
 松江 梅里
 若柳 潮花
 若本多久志
 (順不同)

雲の峯という手もあり
さらばさらばです

故麻生路郎師本葬の日



昭和四十年七月十八日。川柳雑誌社と川柳不朽洞会が合同で、わが師、麻生路郎先生をお送りする本葬儀の日であります。

前線南下のせいで涼しいのはとにかく、戻り梅雨のような地雨が降ったり、止んだりしているのが気になります。それが午後一時過ぎまでつづいて、式のはじまる二時前にはびたりと止みました。式の最中には陽の影さえお堂の中にさし込んできました。そして万事がとまこおりなくすんだ三時をすぎると又、ポツポツと音がきこえます。

天の涙か、清めの雨か、先生と会衆のわかれの悲しみか。先生の遺徳が今さらの偉大さで身にしみる一時間でございました。

式に参するもの五百。弔電を寄せられること二百数十通、追悼句の集るもの……。先生有縁の一同ここに集りまして、心かななるお

送りができたのでございました。

式場は先生命終の不朽洞とは目と鼻のところにある浄土真宗大谷派の受念寺。朝夕、先生はその梵鐘をきかれ、しばしば執筆のためその一室にこもられたというゆかりのお寺であります。

鉄筋三階建の一階本堂は白布でおおわれ、正面玄関の一对の大櫓と堂内五対の白菊、白百合を主とするお花の外は一切の飾りを廃し、清楚な内にも莊嚴の気の満ちているのは先生の思召しにもかなったことと、秘かに存じております。

祭壇正面にははは笑みかけられている先生の御遺影。「柳粹院寂路郎」の御位牌。御遺骨。その前に

川柳のながれにのこるみをつくし
吾水

の色紙をまん中に、六、七枚の弔句の短冊、そしてたれた一枚の紙

に大きく、

雲の峯という手もありさらばさらばです

が、遺党本日の葬儀副委員長松江梅里の筆で墨痕もあざやかにかれ、衆目をひきつけています。

この句は「川柳雑誌」七月号の巻頭「不朽洞句帳より」の最後の句でありまして、この句以後誌上先生の句に接することができなくなりました。又、先生の作句もなかったように伺っております。

はからずも「辞世の句」とわれわれで拝しているのでございます。

一時五十分、第一の鐘がなりまして、一同着座。一時五十五分、第二の鐘とともに奏楽がはじまり、御導師徳乗寺を先頭に御法中の入堂。

二時かっきり御導師の回向がはじまりました。つづいて弔辞。葬儀委員長北川

春集氏。(別稿)

次が中馬大阪市長。社会教育に特別の関心をよせ、短詩文学発展にことの外援助して下さる市長は御多用の中を差繰って、式場到着と間髪を入れず祭壇に進まれました。心のこもった、単なる儀礼だけでは無い御弔辞、それに市長自ら述べていただけたことに先生はどんなにうれしく感じられるだろうと胸がせよりました。

つづいて堀口塊人氏。大阪川柳連盟代表としての御弔辞。大阪川柳連盟はすでに十六回を重ねている毎秋の大阪市民文化祭の市民川柳大会に集まる大阪在住各柳社の連盟です。そして塊人氏は川柳文学の主宰。塊人氏は「寂滅を覗き永減せず」と維摩經の一節にかみしもをつけたがらも「とわたししたちに親しいことはでうちとけて先生に話しかけらるるのでした。」

「滑稽や穿ちばかりが川柳でない」といわれた文学川柳の殉教者路郎先生に最後の挨拶をされました。

市民川柳大会の度毎に路郎先生はいつも、市民のための川柳大会で、単なる川柳人だけの集まりであってはならないといってられました。その運動をおし進め、さらに川柳といわず、広く短詩文学の各分野へよびかけ、短歌、俳句、詩

の世界と大同團結して、自ら発起人となり、連続世話役の労を惜しまれず理事長をつとめていられたのが短詩文学連盟であります。

短歌の雄、安田青風氏がこの短詩文学連盟を代表して御弔辞を下さいました。路郎氏なきあと誰がこの連盟をまとめ、育てるのかと声涙ともに下る感激のおこぼれをいただきました。

老齢かつお忙しい中を東京からおいで下さった川上三太郎氏が友人代表として次に臺前に進まれました。

「路郎さん」と生のことばでよびかけられます。いかにもお友だちらしく、ほつ、ほつと、しばしば絶句されて、ききとり着ねるところもありました。「大阪へくるたびに必ずあなたと僕とは徹宵痛飲して川柳の今日を、明日を語り合った。」ことなど。路郎先生の川柳ひとすじの陰に、日向に、この三太郎氏のあったことを今さらの如く感じさせられました。そして、

「老いたる友よさらばさらばですとは涙」の一句をたむけて下さいました。

弔辞の最後は門下生代表として中島生々庵氏。「古くとも僕には仁義礼智信」の先生の句をそのまま師に仕えてこられた生々庵氏。不

幸な空白一年余のあととは申せ、今日のこの生々庵氏の弔詞はわれわれ一同の心からなる念願でありました。生々庵氏のことばはひとこと、ひとこと魂の底にしみ入るものがありました。いまはただ、先生の遺髪をついで、美しくも、清らかな川柳建立以外に師の高恩に報ゆる道のないこと、そして強



路郎先生は私どもから今日を限りに去って行かれたものではありません。今日を初日として、永遠にわれわれとともにいられるのです。弔辞のあとは弔電披露。ゆっくり正信鶴の読誦にうつり、お焼香がはじまりました。



い強い決意のほどを述べられました。外国の卒業式は終りの式でなく、はじまりの式だと申します。

顔も見え、お元気だった日の先生の御声の録音が、力強く「生命ある句をつくれ」と会場の内外へいつまでも、いつまでも流れてゆく

のでした。

戸田 古方記

里 嘉矩 撮影

弔 辞

路郎先生

先生は七月十日のご誕日を前に、七日永眠されました。誠に悲しいことでございます。

人生の旅人であると自任しておられた先生を、きょう七月十八日弟子に孫弟子、ひ孫弟子、その他相集り、あの世への旅へお送りすることになりました。去る昭和三十三年、先生の古稀のお祝に際し、先生は

古稀はよし 弟子に孫弟子ひ孫弟子

とお詠みになって、お喜びなさいました。今このお喜びの句を思い出し、弟子に孫弟子、ひ孫弟子がお見送りする様を考えますと、丁度お釈迦様の涅槃の図を見るような気がするのでございませう。先生は一八八八年、備後尾道にお産まれになったと承っております。十七才の頃からとのことでございますので、一九〇五年頃から川柳をおはじめになり、丁度六十一年の間、川柳に魅入られた生活なさいました。

学校は現大阪市大の前身である大阪商船を卒業され、大正四、五卅の第一次世界大戦中は、大阪通

同



蝶久
シロツ





萩城跡昔を偲び降る小雨
橋消えて名ばかり残る街となり 河内長野市

後家顔をならべて買い出し喋り

若い気の腕にも老が目立って来

くそ叮嚀な会釈で座席へ割って入り

物干も子供産れた賑やかさ 土佐市

友情にすがれば昔の友でなく

肩書も消え楽しいコップ酒

役人をこわく誘えば飲める口

ふるさとは此処まで地蔵さんを撫ぜ 倉敷市

惜敗を母校の旗にはぐからず

課長までの距離伸びたり縮んだり

身に沁みる嫁に貰った熱いお茶

夕方の市場しじみをつゝいてみ 大阪市

うなぎ屋の匂いも失せたのが並び

路郎師御逝去

政権も利権も師の君を支配せず

温容を心に遺し逝き給い

蛙の声農薬反対のデモに似て 大阪市

蜂一匹たわむれもせずスモーク街

人の花赤いか努力忘れまじ

ろうけつのカーテンママのアルバイト 香川県

分譲地夢はてしなく金がなく

同

森本黒天子

同

同

同

野本 未遂

同

同

同

水粉 千翁

同

同

同

福富 隆子

同

同

同

同

天正みさ子

同

同

同

三井 酔夢

秋田犬女主人をひきまわし
ほろ酔いの妻のハミング梅酒らし

セーラーを脱げば大人の顔を見せ 松原市

生活の知恵までとうとうママを抜き

新幹線詩情乏しい雨が降り

新調につきこばされて愚痴を聞き 宿毛市

特価品又だまされた寸足らず

微熱ぐらい妻はパーマして帰り

アンテナのように早耳聞いてくる 玉島市

得手勝手まで性分にしてしまい

日本の文化車が歩いてとり

中卒を社長握手して迎え 小松市

嫁ぐ日に古き言葉も母の愛

うんうんとうなづく妻は眠ってる

無防備のような女の後を随け 鳥取市

倦怠期燕の巣立ったのも知らず

勝手にしろと云ったほんとに買って来た

草茂る道巾なおも狭くして 玉野市

二次会の頭会社に来て直し

スピッツの強がり主人を傘に着て

瞳を落す女の素振り不輪めき 名古屋

好き同志のまんまでつづきそれ切り

今日は今日あしたはあしたの眉を引き

同

同

同

同

同

渡辺伊津志

同

同

井上 旭峯

同

同

塚本 健二

同

同

近藤 秋星

同

同

小谷 仙山

同

同

花東千久良

同

同

川柳会開催に努力を致され、昨年で第十六回と回を重ねました。また関西短詩文学の結成を呼びかけられて、川柳以外の短詩、すなわち短歌、俳句、詩と四部門の連合会を組織され推されてその理事長となられ、講演会やら作品展開催にも努力されました。大阪市立中央図書館が完成いたしますと、その中に「短詩文学文庫」設置を提唱され、昭和三十七年以来、世話人として奔走尽力なさいました。この大阪におきまして「なにわ賞」受賞者選定委員に選任されましたことも、故なきにあらずと存ぜられます。

先生は、市民文化祭の短詩文学各部の大会のために奔走されてご疲労の余り、数年前に一度倒れたことがありましたが、その間も雑誌の発刊は続けられ、今回のご病氣ご療養中も雑誌の刊行には精力を出し尽され、遠方の人々は先生のご病氣さえ知らぬ人が多かったでございます。

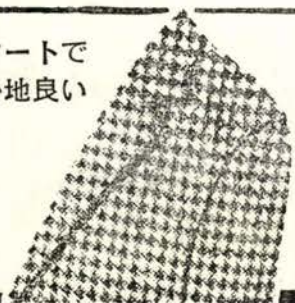
今になりまして、先生に、もう少しご休養を取って頂いていたならと後悔いたしておりますが、それも先生のご気性として、お出来にならなかったかとも存ぜられます。くり返しますが、弟子に孫弟子

堀江 正夫

北川春巢

各地特約店に有り

スマートで
着心地良い



ありし日の

思い出を語る

—— 葭乃先生を中心にして ——

—— 出席者 ——

麻生	清水	西尾	川村	戸田
葭乃	白柳	栗	好郎	古方
				橘高
				葭風

葭乃先生



葭



好郎

葭風Ⅱ昭和四十年七月は政界の河野一郎氏、文学界の谷崎潤一郎氏が亡くなり、巨星相次いで墜つの感が深かったのですが、川柳界でも大御所麻生路郎先生が七月七日にこの世を去られました。今日は皆様にお集まり願って葭乃先生の中に、恩師路郎先生を偲ぶ座談会を持つことにしました。

路郎先生は眠るような大往生だったとお聞きしていますが、葭乃先生、ご臨終の様子から。

葭乃Ⅱとにかく亡くなる四五日前頃から急に食欲がなくなっていて、いつも楽しんで食べていたものもいらないと云うし、牛乳や液体のものまでいつものように多量に飲まないようになったのです。併し、喋ることははっきりしているのでも何時も平素でも小食ですから、あんまり気にもかけなかったのです。それが時々うわごとのよ

うなことを云うようになったので、何か家族のことでも云うのではないかと、子供達も気をつけて看病をしていましたが、誰の名も呼びませんでした。時々講演のひとくぎりのようなことを喋っているのを聞きました。それでどの辺が臨終なのやらちっとも素人にははっきりした線が出ていませんでした。若し、臨終がはっきり判

っていたら、かねての希望の菅原伝授手習鑑の寺小屋のさわりをレコードにかけて聞かすのでしたが、病氣中は雑誌の仕事や、それに関連した仕事で看病のかたわら、少しの暇もなかったで、そのレコードを手に入れてなかったのです。併し、万一レコードを手に入れていても、意識のあるうちにそれを聞いて欲しくもあり、又それをかけることで当人に死期をはっきり知らせることは残酷かも知

れないと、後でそう考えたのです。

古方Ⅱ今仰言った寺小屋のさわりのことで生前先生は何か仰言っていたのですか。

白柳Ⅱ「臨終が冬なら『いろいろはおくりで逝かんかな』という句が不朽洞句帖にありましたね。

古方Ⅱあ、そうそう。

葭乃Ⅱ退院して病状が快方に向っていた時、「臨終が冬だったら寺小屋のさわり、春だったら野崎村のさわりをじっと聞いて逝きたい。若し暇だったらなあ。」と云っていました。私が雑誌の仕事で何時も忙しかったから……

古方Ⅱやつぱり先生ですなあ。先生の面白羅如ですよ。国立病院の中村博士が死ぬ直前までカメラで死の記録を残して大往生を遂げられたあの心境を思い出しました。

葭風Ⅱそれでは路郎先生の思い出をばつぽつお願いしましょうか。古い時代をよくご存知の白柳さんから。

白柳Ⅱそういわれても思い出が沢山ありすぎて整理をせんとどれから話してよいか。

葭乃Ⅱお話の合間に誰も知らぬ古い話をおきながら下さるでしょう。

葭風Ⅱ路郎先生といえば、「右手にたばこ、左手に盃」といった言葉で象徴されていましたが、栗Ⅱもう一本手が欲しいなあ。

ペンを持たれる手でしょう。

古方Ⅱ塋で空襲で焼け出されて鳳に疎開した時、先生はわざわざ来て下さって丁度アルコールの生なりのがありまして、先生と二人で飲んでしまいました。先生はそのまま寝てしまわれて泊って戴いたことがあります。お酒はとて



白柳



葉川



好郎

お好きでしたなあ。

葉川「そうですか、本当に好きで飲んでおられた。阪大川柳会では路郎先生とそれから長崎柳秀先生の二人だけの机の前にお鈍子がのっておって句会が始まっておりまして。

薫風「葉川先生の句に有名な「飲んで欲しやめても欲しい酒を酌ぎ」の句がありますが、家庭でのお酒はどうでしたか。

葉川「気が向いたら家でも飲み

ますが、どちらかと云えば外で飲む方が好きなんです。毎日見ている水屋の前で毎日見ている小鉢のご馳走に箸を入れてちびちび飲んでいても変った話相手があるのでもなし、仮に女給さんでなくても閑東煮屋のおっさんを相手にうだうだ云うて飲む方がずっとお酒の味がある云うことぐらいは私も知っていたので、飲みたくない時は無理にすすめもしませんでした。

葉川「それで奥さん「お帰りにならず刺身も色かわる」の句が出来たのですか(笑)。

好郎「先生は献盃が嫌いでした。薫風「それに私は下戸の方ですの、酌ぐ間が悪いといつも注意をされましたよ。

白柳「僕も不肖の弟子でお前は飲まないで愛想がないと何時も云われていました。

好郎「酔いが廻るとお女将や仲居がおろすが、客があくびをしておろすが、社会を論じ川柳を語り、もう「やま」ですから帰って下さいと云われるまで談じ込まれ、実に愉快そうに笑って出られるのが先生でした。

薫風「岩崎愛二氏のお話によると、新町の「与太呂」で所謂痛飲していた時、興大いに挙がり、先生は色紙短冊に染筆しておられた

が、やおら、与太呂主人の割烹着に墨痕淋漓と書かれたのが、あの、「酒とろりとろり大空のころかも」であった。主人は神聖なるものに何事ぞと色をなしかけたが、じっと見ると立派な句、立派な筆跡なので気合いをそがれてしまったと云うことです。これでも判るように先生は炎の人とか情熱の川柳人とか云われたように激しい性格の持主、殊に川柳には非常な闘志を燃やした方でしたが、これは、私が先生を知りました頃には大分薄れていられたと云うことです。お若い時の先生はどんなだったのですか。

葉川「左様、先生は中途半端なことが大嫌いだったために遂に昭和十一年に職業川柳人を宣言されたのでもよく判ることと思います。

私は昭和六年から門下生になったのですが、それ以前のこととは白柳さんがよくご存知だと思いますから。

薫風「古い「川柳雑誌」を見ると柳人の印象をアンケートで求めた欄がありますが、先生のは無産党代議士とか云うのがありましたね。

葉川「それ爆弾

白柳「爆弾で思い出しますが昭

昭七・八年頃、川柳雑誌社の神戸

支部へ「爆弾を抱いて来たる」という題で講演をされたこともありましたなあ。

薫風「私の爆弾という印象はそのことだったのかなあ。

葉川「昔の路郎の性格の非常に激しかったことは今ここにおられる方は一人も知っておられないでしょう。情熱そのものの人で自分が思っていることをちよっとも味つけなく、水増しもせず他人に云う人でした。非常に感情家でもあった為に、言葉に飾り気がなく、腹が立った時にはまるで犬か猫のように私達に云われることもありました。亡くなられた福田山雨楼さんが執筆された文章の中で、「失礼ですが先生はちよっと子供のようなどころもあります。」と書かれたように感情の高ぶっているときは、ちょうど駄々っ子のようなどころがありました。それも自分の主義主張をあんまり潔癖に考えるからだと思います。

薫風「アートさんが、「親父はすけすけ物を云う性格だったので皆さんの感情を害することも多かったでしょうけれど、もの喜びをすることも人一倍だったので、皆さんのご厚情に草葉の陰で喜んでることを思います。」と仰言っていました、その時その通りだ

と思ったことでした。詩人の魂とはそういうものではないでしょうか。

葉川「退院をした日、梅里さんが玄関へ大きな鯛をお祝いに持ってきて下さいました。いつも鰯や鯛を食べますので、切り身にして大事に冷蔵庫へ入れ、最初の日にそれを蒸して食べてもらいました。お膳をさげるときに、「ちよっとそのお膳をそこへ置いてんか。それからなあ、梅里さんへ電話かけてすぐ来てもらて。」と云いますので、「何ぞ用ですか」と聞きましたら、「今の鯛美味しかったと云いたいんや。」と云います。「梅里さん忙しいのにそれだけやたら今度会う時に云いはたらよろしおます。」「今やないといかんねん。」それで私が電話をかけて、お留守でしたと報告すると、「そうか、そんならそのお膳をさげてんか。」と、そんなことでも自分の情熱のさめぬうちに云いたかったのです。

薫風「七月に生れ、七月に亡くなられた先生は正に情熱の人でした。これも情熱の一端になります。先生は句の指導ということは一流でして、門下生にも優秀な作家が輩出しました。殊に松坂俱楽部のご指導ぶりは特別だったらしいのですが、どうでしたか、古

方さん。

古方Ⅱあのおう、私が松坂倶楽部へ初めて伺ったのは昭和十三年の夏です。春から生々庵さんが一足先きにお弟子入りをされてられて私がひっぱられました。松坂屋の七階で……。

好郎Ⅱ松坂倶楽部があつて、その中に川柳講座があつて、その指導が路郎先生であつた。その特徴は席題が出て作句しておる間に各々が作つて来た研究句を先生の前に提出する。そして一人一人先生の机の前に呼ばれ、そして、その句について、実に厳しい批評ご指導があつた。(当時の一枚を大切に保存されていて持参、見せて下さる) こうしていちいち朱筆で添作して下さつた。生々庵氏が、今頃まだこんな句を作っているのかと叱られて、平身低頭していられた姿は今でも覚えております。併し、その教導によってその当時の会員達に優秀な作家が生まれた。

戸倉普天、中島生々庵、故武部香林、故宮田不二、小川恒明、新川博也、戸田古方、故米本貴志子の諸氏で、末席を汚したのが私です。

古方Ⅱ私も根よう参りました。が、先生はとても私共の及ばん程の根気のよさで私達を導いて下さいました。

好郎Ⅱ月二回で会費が一円。

栗Ⅱその当時の普通の例会は三十銭だったのです。だから今云うてはる一円だったなら良い作家も輩出するでしょう。(笑声)

古方Ⅱ紺の毛氈を敷いてその上に銘々硯を置き、短冊の紙に席題を書くのです。夏にはおしほりも出しました。

好郎Ⅱ松坂倶楽部の会員で北野劇場の古川緑波一座の観劇句会をやつた。その時に得た句を次の句会の時に披露され、おおかたの人の句が緑波の劇を見たものでないと判らんような句が多い。吟行ということは句材を新しく求めに行くのでその劇の中から新しい境地を発見して作句せねばならんと教えられた事を、私は今でも忘れな

い。

古方Ⅱ私の川柳を始めた頃うれしまぎれに、あちこちの句会へ誘われて顔を出したところが先生に見つかつて、「まだ早い。わしがつんと云うまで行つたらいかん。」と叱られました。併し二十何年経つた今日から考えるとそれは誠に正しいお導きであつたと思

います。

栗Ⅱ先生は句の上では一歩もゆづらず妥協されなかつた。阪大川柳会、長崎柳秀博士は若い頃には、「金魚屋に舞妓袂を教えら

れ」やら「心中へ明日のお発ちを

聞きにくる」とか良い句を作られていました。が、老齢になられたためか、時には平凡な句も作られるようになりました。併し「本人は熱心なあまり自分の句が抜けないと凄くご機嫌が悪く、自信満々で

「何でこの句とらははしませんのか。」と路郎先生に訊ねられても、先生は一言の下でした。商売気のある人なら一句ぐらいはと云う気になるものですが、決して決して……。それが阪大川柳会と云うのは句集を出すにしても句会をするにしてもすべて柳秀先生と路生先生とお二人で経済面からすべてお世話して頂いてたんです。が、そんなことはかもではれしません。い、ものはい、悪いものは悪いと、少しも妥協されませんでしたね。

薫風Ⅱ川柳塔の選には私など選者との間に太い血の通つた水道管のようなものを感じていました。抜いて戴けたら川柳として不安であつた句が急に安心立命するのでした。豆萩、水客、満潮といった異色ある作家諸氏も先生の雑誌の選の確かさ、信頼感を常に云つておられました。先生のご指導のことはこれ位にして、先生は書も上手だったし、画もこなされた。一つこのことについて。

栗Ⅱ先生

の書はたしかに一家をなしておられましたな

あ。

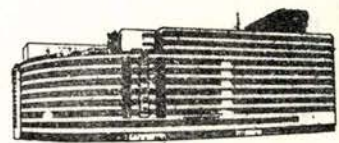
好郎Ⅱ生々庵氏の浜寺のお宅にある軸は大了なものですよ。私の

家に先生の「れんこん」の画に「れんこんはこらを折れと生れつき」という句を書いて、「古句にこんな面白い句があります。不朽洞主人」という額があります。が、訪れる人は皆画もよろしいが字もうまいと賞めておられます。

古方Ⅱ「川柳雑誌」の題字を見た人は「川柳の雑誌」と読みます。というのとは雑という字の偏の上のところ、正に「の」の字に見えるからです。私、いつか先生に「こんでよろしいか。」と伺つたところが、「こんでよろしい。私はちゃんとした王羲之の法帳で長年くずし方を勉強したからこれで間違はない。」と仰言いました。又、字の話のついでに協同の協という字は偏は十でなければならぬ。これを十偏に書いたら反対の意味になる。これも先生から

最も美しいこと
最も近代的なこと
最もご便利なこと

ハンシンは
皆様の百貨店です



大阪梅田・水曜定休
阪神
電361-1201(大代表)

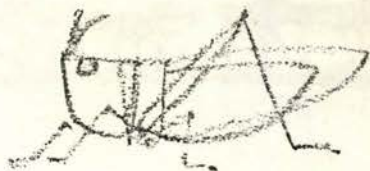
教えて戴いて、町を歩きますと、堂々とした一流のところに協の字が沢山書いてありますので、おびやかされどうします。

白柳Ⅱ先生の字のお上手なのは誰でも知っていますが、画もお上手なことをしている人は少ないですね。

蓼乃Ⅱはじめは絵画きになりたくて美術学校へ入れて欲しいとお父さんに云つたら、「画では暮して行けん。商売人は商業学校へ入つたらいい。」と云つて無理に高商へ入れられた訳です。

栗Ⅱその頃はまだ爆弾ではなくて、親の云うことをよくきかれたのです。(笑声)

蓼乃Ⅱですけど、授業時間に教師のカリカチュアを書いたり、小使いを貰つたら絵具を買つたりしたものだそうです。それで宴会の



路郎氏を

偲んで

神田 南 畝

路郎氏の訃を聞いて愕いた。勿論毎月の誌上消息を読んで静養中とは承知していたが、まさかそれほど重態だとは思わなかった。

併し折角一門によって催されんとする喜寿祝賀の筈も辞退すると書かれていたので、或は可なり重症かとも案じていたが、その案じが事実となったのは何とも哀しいことである。

茲で云うのは、氏の死は単に一門のみならず、大阪柳壇のために、更に云うなれば全柳壇のためにも大きな損害であって惜しまれるのである。明治末期時代には川柳の存在はあっても、短詩文学としての存在は圈外に置かれていたのである。それを現在の文学の地歩に押し進めて来た一人として路郎氏の功績は大きいものだと思っている。庶民的という名による低俗性、卑俗性を脱皮して、現代の社会性の中に川柳の本質なる

鋭い諷刺、比喩性を確立せんとする氏の努力は高く評価してよいと思う。

近頃川柳の表現が、俳句に近似している傾向に就て、親しく氏と語りたいと打合せたことがある。これは余り知られていないが、氏も暫くであったが俳句を志向し、大正十三年に当時の俳誌、新聞俳壇の作品を蒐め、「大正傑作一万句」という句集を編した経歴者であったので、それだけ俳句にも理解があると思つたからである。だがこの打合せも氏の訃によって、遂に実現せずに終つたのは残念である。

私が氏と初めて会つたのは、この句集が出版された当時で、故宗斤居士の死は大物住時代の居て、居士に紹介されて知つたのである。氏と居士とは小学生時代からの友人で、非常に親しい仲であった。この会つたのも凡そ四十年以上にも

なるのだが、氏もまだ若くそれだけ元気で、談論風発という意気軒昂の貌があった。その後氏は川柳作家として邁進されたため、私たちとは自然数年を疎隔のうちに過ぎたが、偶々昭和三十一年、短歌、俳句、詩、川柳作家によって関西短詩文学連盟が結成されることになって再会、氏が委員長に選ばれた関係上、いろいろと運営に就いて会うことも多く親しく共にやつて来たのである。

氏は一見矍鑠、孤高のように考えられる風貌であるが、實際は温情家であり、又優れた情熱家であるのは深く氏を知るものの、何れも認めるところで、その温情と情熱が現在の「川柳雑誌」を策きあげ、多くの門下を育成したものと推するし、関西短詩文学連盟も又氏の努力と情熱によって組織づけたのである。

年齢より云えば、その死は或は肯定せねばならぬかもしれないが、川柳作家としては尚数年の寿を欲しかったと希うものは私のみではないと思う。

七月号を開いた時に読んだ「不朽洞句帖」の句の一節
臨終が冬なら「いろは」おく
りて逝かならん
雲の峯という手もあり
さらばさらばです

を再び読んで、氏の最後の詠とも思い厳肅な合掌をした。
(俳誌「早春」主宰)

席でも酔が廻ると、醬油やら葱を使つて即席の絵を画くこともあります。知人の絵画きさんが、玄人の画けないよいところがあるといつて賞められたそうです。

栗川先生の前路郎先生と中村博士の面目躍如たるお話の中に、中村博士はカメラで死の記録を残されましたが、路郎先生は毎月の不朽洞句帖でやはり死の記録をとられた訳ですね。

白柳二五月号では、しがみつくほどのこの世でなかりけり
六月号では
炎の中に忘の字が灰となつて残り

七月号ではとうとう
死はゆらぐ文楽人形に死はゆらぐ
死の影が紋十郎の背後からいつのほどにかブツクエンドに似てわれも
臨終が冬なら「いろは」おくりで逝かならん
雲の峯という手もありさらばさらばです

という死を淡々と見つめた記録を残されました。
薫風先生前、座談会の後では必ず先生から、「割に面白いのが出来たなあ。」とか、「もひとつ感心せんぞ。」とご批判を受けましたが、今日の座談会を先生はどう聞いて下さっているでしょうか。

好郎お仏壇から「その話一寸違つてるで。」と云われそうですな。

栗川そうくて、そんなことがあったあつたと頷いてくれてはるかも知れんで。

白柳二又、この辺で先生の、昔こんなことがあつたといつて、繰り返えし繰り返えし喋り出しはる癖が出そうですなあ。

古方二私の顔の特徴は口の大きいことと云うてはつたあの口が今に開いて、あははとお笑ひにならんかいな。

薫風二冗談が続きましたが先生は陽気なのがお好きでしたから、喜んで下さっていると思います。話したいことはまだまだ沢山ありますが限りがありますので、この辺で。

黄銅六角ボルトナット及特特殊挽物全般

合資会社

西出螺子製作所

大阪市天王寺区宰相山町142

TEL(761)3452~4

夜間(762)4408

方角帖

北川春巢選

小松市 関戸宗太郎

宝物みたいに母のくじらざし

叱られてくれる妻あり急く家路

めざましのベル用もなく病んでいる

旧姓にもどって男らしくなり

仙台市 平野光道

岡山県 直原七面山

六月の声へ女は脱ぎたがり

寿子嬢に捧ぐ

恋の矢を弾き返した寿子さん

ある時は空気のような寿子さん

恋愛論を聞かせて呉れと寿子さん

寿子さん女の業をまだ知らず

バラのようなトゲは持たない寿子さん

青森県 木村凉人

恩給の真っ先老眼鏡を替え

歩行者の方が着けたいヘルメット

着て誇り脱いで誇るも女なり

豚売ってヒューマニズムに少し触れ

香川県 三井酔夢

浮草の明日を信じないみづくし

雑沓に私を凝視するわたし

宝石が欲しい私を打擲す

愛犬の急死心に穴があき

大阪府 早川清生

入院

三尺さがって俺も肝炎か

体温計ぬくめるだけのめしを食う

看護婦の寮にラジオの昼のジャズ

退院へ一つふえてる家の鍵

奈良市 村上春己

近頃は辞職なんぞともう云わず

年寄りの頑固に父もなっている

ガス自殺未遂が交通事故で死に

病床の目が約束の念をおし

京都市 室井八九寸

書き入れが古書を滅法せり上げる

餌に不自由ないカナリヤの窮屈さ

キモノでの外遊洋服デザイナー

記念日を思い思いに打つ時計

宝物みたいに母のくじらざし

叱られてくれる妻あり急く家路

めざましのベル用もなく病んでいる

旧姓にもどって男らしくなり

仙台市 平野光道

弔電を電話で打って義理終り

一片のパンに勤続して定年

血を売った金とも知らず給食費

大阪市 今西章雅

定年期ふるさとのない大阪弁

本業はキャバレーの歌手みだれ籠

損させた株屋へ政府テコを入れ

松山市 月原宵明

紫陽花に情痴の朝は明けにける

生きているが嫌になつてバーで咲き

電車待つ目に成人映画あらわ

鳥取県 鈴木村諷子

生甲斐がどこにあるのかあの若さ

旧道が湖底へ続く哀愁よ

入院を少し延ばして田を植える

加賀市 那谷 光郎

あちこちと水の犠牲も聞く暑さ

大阪市 賀 本 昇

嘘言うに声帯せまき門となる

扇風機つけたり止めたり寝つかれず

年よりも派手な背広で浮気する

鮎の味窓は若葉の見える宿

ステレオの当てであり内職熱が入り

質草も揃ったところで長期スト

あの尼にかつら被せたらなと思ひ

宿毛市 渡辺 伊津志

神戸市 吉 田 隆 史

鳥取市 近 藤 秋 星

雨傘の色で着物が見直され

お茶ならと女性が隙をちよつと見せ

尤もらしい顔して法螺を聞いてやり

可愛げもなくぎん蠅が足さすり

海は呼び山は招けど麻雀狂

松江市 柳 楽 鶴 丸

ミス鳥取に酒を酌がせたのが自慢

金沢市 根 上 杏 花

早起きは三文の徳深呼吸

病人のまだヤキモチを焼く元氣

倒産が記事にもならず小企業

大工道具買ったらすると云ったけど

宮崎市 野口 卯之助

残酷にマネキン隅へ積み重ね

鳥取県 清水 一 保

すじ書きの型にはまった恋でなし

大阪市 天正 みさ子

俺だけの肉体でなし養生し

羽咋市 三 宅 ろ 亭

不良化の防止剣道など教え

気前よくふるまってるが火の車

はつきりとそこまで云えば角が立ち

出馬前握らす万端ととのえる

年よりも若い血圧はめられる

玉島市 井 上 旭 峯

今治市 越 智 一 水

若社長すべてを呑んでスト終る

衿もとをあわせて見舞客迎え

大物が来て座布団の置きどころ

アルバム自分すく顔すかぬ顔

色紙短冊
書画用品

大の字に寝る倅の古畳

羽曳野市 今 井 岳 太

倉敷市 水 粉 千 翁

労働と汗の個展に木蓮一枝

口紅を塗って哲学論を吐き

嫉妬をも知らず働き蜂の習性

ひよっとこの面をかむって汚職する

名古屋市 花 東 千 久 良

日の丸の下で思想を考える

ただいま仕事偏屈でない黙舌権

守口市 橋 本 雅 巢

醜聞の噂へ冴える美しさ





入門講座

研究題 「我慢」

清水白柳

路郎先生が御逝去されて、受けたショックは言葉であらわせない程大きかった。父が亡くなった時に受けたショックも大きかったがその時はこちらが若くて元気があったから充分受けとめることが出来たが、先生の場合は、こちらと共に倒れそうになった。丁度椅子の背のたれを突然はずされたような気がするのである。もたれるところが無くなったのだ。全身の力が抜けてしまった感じである。併しいつまでも悲しんでは居られない。先生の育ててこられた川柳の幹を枯らしてはならないのだ。その枝をその葉を、根の先端を伸ばす努力をすることが先生への御恩返しなのだと思うのである。さて句を見よう。

作者は米国カルホルニヤ州に住んでいられる壮年の川柳家である。川柳雑誌の句風にひかれて投句して来られた。排日の句などはそうした環境から生れた句で尊いものだと思う。押しきった恋は貧しさ我慢する
腕白が過ぎる社長の児をあやし
腕白の句に我慢のしどころを見せて面白。
熱い風呂おだてた孫はまだつか
り
新教育我慢を知らぬ子に育ち熱い風呂の句はうがっていると思
う。
静脈をぐいぐい探す針の先
面会の吾が子が抱けぬ胸を病み
我慢の文字を使わずにそれを感じ
させている。
言分へもう正妻は泣きもせず

満員の次の駅まで待つ生理
満員の句に微笑させられた。
禁煙はもう五日目と云う虚脱
母李
開病の動けぬままにある土用
表現に苦心のあとが見えて楽しい
句である。
PTA会長の子だからがまんさせ
保夫
やせ我慢どうせ金には縁が無し
この作者はらくに作句しているの
が判る。
教養が我慢をさせて酔い切れず
滋雀
朝迄は我慢をせよとナース消え
何かすこし理屈っぽい感じのする
のが惜しい
我慢する限度たばこをぐつと消
す
和三角
子の注射抱いてる母もくいしば
り
いい表現の句で申し分がない。
辛抱よく我慢に我慢生き字引
繁太郎
生き字引という下五文字でやっと
救われた。
真夜中の我慢必死に伏せる牌
真砂
使ってある文字の割に句に深みがない。
我慢してこれ着なさいと次男坊
松風

我慢会借りて来たよな顔になり
次男だから句が生きてきたといえ
る。次の句の借りて来たよなとい
う句語はよかった。
苦しみの患者に我慢する看護
勝子
患者が我慢するのではなくて、看
護する方が我慢しているのではあ
る。
三人娘姉いじらしい我慢する
弘生
身体にはこの方がよいと冷房せ
ず

〔新 発売〕



山之内製薬株式会社
東京都中央区日本橋本町2/5
大阪・福岡・札幌・名古屋

新 神経疲労回復剤！

バランス

神経も

レジャーがほしい！

●はげしい頭脳労働のため、思考力に疲れをお覚えの方
●お仕事がお疲れの方
●イライラしておいでの方
●重要な交渉、商談などをひかえて不安なお気持ちの方
ぜひ、バランスをおのみください。

一〇ミリグラム
六カプセル……………二〇〇円
二〇カプセル……………三三〇円
三〇カプセル……………五五〇円
(はかに医家向大入)
(包装もあります)
●お申込しい説明書・試供品を
送呈



いる。冷房の句は面白い着想であ
る。

無痛分娩女の我慢一つへり

みさ子

目まいまで我慢し煙草吸いはじ
め

初めの句は男には分らないが、そ
うだろうと思う。目まいの句は佳
句だと思ふ

もう我慢出来ぬとシヤモジ持っ
て立ち

赤字消す迄のがまんも妻けな

☆第一の句碑

すべりんこ 親は涼しいとこ
で待ち

昭和二十五年五月二十八日、太
阪市南区三休橋南詰、中島小児科
診療院後庭藤棚の下に、診療院の
新築に祝意を表して不朽洞会の有
志によって建てられた。句は小児

名も知らぬ 山の起伏をうれ
しがり

昭和二十五年八月三日、奈良県
宇陀郡三本松村（現在は室生村と
改称）上田翠光居附近に建立され
た。海拔五
百余米の山
村で、八月
十二日、十
三日の両日
に亘り句碑
建設記念川
柳会が催さ
れ、路郎師
夫妻をはじめ
四十名の
参加があった。
☆第三の句碑
俺に似よ 俺に似るなと 子



——第二句碑——

不朽の句碑

杏花

主婦の怒りを面白く描いている。
赤字の句はやや単調だといえるよ
うである。

ただ一度だけだが産むともう泣
かず

いい句である。天地人ならそのう
ちに入る句。

惜別の我慢鳴咽となり崩れ
辰 始

暑さへの我慢持物日除けにし
どちらも佳句で三才に入る句であ
選ばれた。但し木碑のため破損堪
だしく現在はない。

☆第二の句碑

天下り人事へ我慢する秘書課
淀 月

妻子への我慢左遷の盃を受け
この作者の句にはソツがないかわ
りに、この作者の個性を見つける
ことが出来なかった。

ハンガースト二度とやりとうな
い我慢 章 雅

この作者の句にはむらがある。今
回は余りよいとは言えなかった。
大声へ我慢しきれず全額払い
を思ひ

昭和二十五年九月十七日、川柳
の町、岡川県久米郡久米南町、
国鉄弓削駅前に建立、同日句碑建
立を記念する西日本川柳大会が、
出席者百四十余名の盛会裡に開
催された。「句碑は作家個人を記
念するといっただけでなく、川柳を
知らない人たちも、何かの機会に
句碑を見、句碑に彫られた句を読
むことによって文化の道しるべと
なる場合も多いのである。その意
味で句碑の建設は一つの文化運動
である。」と路郎師は当日の謝辞
の中で述べられたが、師の代表句
とも云われ人口に膾炙しているこ
の句が句碑になったことに大きな
意義がある。そして、この句が益
々光彩を放ち、「いのちある句を
創れ」と叱咤された師の精神が、
弓削の地で永遠に川柳界へ叫び続
けることを祈るのである。

☆第四の句碑

古くとも僕には仁義礼智信
昭和二十六年四月二十二日、岡
山県和気郡吉永町福満の大森娘句
楽居の前庭に建立除幕された。路
郎師は、「この句に盛られた思想
が古いの新しいのと云って見たと
ころでそれは口頭の論議に過ぎな
い。寧ろこの句の句境に沿うてそ
の生涯を貫くことが出来るとした
ら人生の幸福これにすぎるものは
なからうと今も信ずる私なのであ
る。

娘句楽氏にこの句を呈した所以
もそんなところにあるのである。
この句を通じて一人の娘句楽氏を
得ることは更に第二第三の娘句楽
氏を生むことでもあると思えば微
笑を禁じ得ないものがある。あ
あ、光輝ある句碑よ。私の代弁者
である句碑よ。いつまでもいつま
でも健在であれ。」と云われる。

第一の句碑は惜しくも破損した
が、残る三基の句碑は路郎師の分
身のようにいつまでもいつまでも
建在で、人々に語りかけ、柳界の
発展を見守ってくれるように切に願
うのである。不朽の句碑よ川柳塔
よ。

（橋高薫風記）

白柳

白いと思った。

以上で終ることにしたが、これ
が川柳雑誌の終刊号なのでこの誌
上ではこれでお別れになるのであ
るが、新しい気持ちで又みなさ
さんと共に句の研究が出来たのを喜
しみにしてそれまでのお別れが短
い期間であることを祈りたい。

路郎先生にこの原稿を見て頂け
ないのが何よりも悲しい。合掌
師の逝きて今年の暑さ身にこた
え

気軽にお立寄り下さい

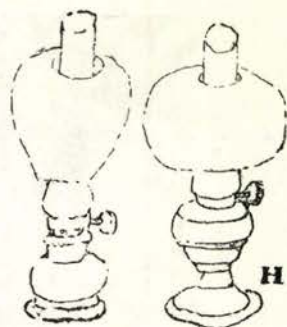
川柳人のご宿泊は

大阪駅から十分の

旅館 立花屋

大阪市北区堂島上2の52

橋高薫風 TEL(341)4613



足跡

石曾根民郎

旧制中学校の四年生のとき、国語の時間に川柳を講義されたのが川柳開眼の第一歩であった。中学校に入ってから私は何となく七五調の音律に心をひかされていたことを、のちになり振り返って気がついたのであるが、この四年生で初めて川柳の名を知ったわけである。

勿論古川柳であった。本降りになって出てゆく雨宿り

清盛の医者は裸で脈をとり教科書に出ていた二十句くらいのはかに、担任の若林昌義先生はいろいろ黒板に書いて例を示された。懇切に解説され、一句一句を味わせた。川柳というものは俳句と違って親しみのあるものだ、そういう受取りかたを私はそのとき心にやきつけた。

学生時代が過ぎ、父と一しよに業務にいそしんだ。そんなあるとき、(昭和四年夏のことだが)町

内の明倫堂という書店の書棚に「川柳漫談」の書名が私の目にきらりと光った。中学校四年生以来、久し振りの川柳対面である。私はやや昂奮し、やや雀踊りしたようであった。

著者は麻生路郎とある。いわば川柳随筆で、どの頁を読んでもユーモアのあふれた滋味がある。古川柳という古典は中学校で知ったが、新しい川柳に接した感激はまた一入のものであった。

奥附の裏にある主幹・麻生路郎「川柳雑誌」の広告で、早速実物見本を取寄せた。それと共に「川柳漫談」を著者に送って、一句をしたためて貰った。あつかましい田舎者と思ったことだろうが、早く揮毫していただいた。

みな呑んでるぞビールが散るぞ夏 路郎

この句のスタイル、新しさが私の川柳創作に大きい影響を与えた。初めて現代川柳と取組む者に

とって、その指導者が句の運命のように作者を決定するものであらう。それはたしかなことである。それから句に励んだ。夢中であつた。私の句が、私の川柳が初めて活字にされたのは「川柳雑誌」の昭和五年一月号である。

貧乏は子供角力に勝ってくる不味そうに朽葉がぐすりなり雅号は(らっぱ)であった。しばらく続いたが、どうも不満で途中で変更し、本名の民郎として今日に至っている。

毎日よく句を作った。一生懸命であった。発行所へ手紙を出した。句以外のことで、なにかと親しみを深めていった。

昭和六年八月特輯号の表紙は楡ヶ岳であったが、そこには私が大きく出ている。実は楡ヶ岳に登ったとき、バックにして記念写真を撮って貰ったのが出来がよいので、暑中御伺いがてら手紙と一しよに発行所へ一枚送ったのがこの

掲載となったわけだ。いまそれを見て、私も若かったなと思う。

翌年昭和七年の五月号は「川柳雑誌」一〇〇号記念で、「川柳の夕」が開かれるとあり、思い切つて上阪した。玉出本通三丁目の路郎師の家を先ず訪ねた。既に東京の川上三太郎さんがおられた。この催しに講演を頼まれてやはり上阪されたわけだった。

そしてこのとき初めて路郎師と逢えたのである。腹乃奥様とも初対面、朝から「川柳の夕」が朝日会館で開かれるまで、私はどこへも出ずお邪魔していた。

気むずかしいが、また情熱に溢れた方だと印象づけられた。何かと親切にもてなしてくれた。「川柳の夕」で誌上にお名前だけ知っていた方々とじかに会えて嬉しかった。たのもしい感激を抱いて帰郷した。

木村晃章君を知り、平井蒼太君を知った。平井蒼太君は滋賀県にいたが、打合せて京都で落合い、山本定一君と三人で京都をぶらついた。山本君は川柳家ではなく、風俗研究で、蒼太君と知人であった。そこで私は夜の京都を知った。

蒼太君と共に路郎師を訪い、一日中語った。私があまり話しかけないので、折角こゝまで来たのに

意見を聞かないのはどうしたことだと叱られた。こわかった。

昭和十一年秋、路郎師は松本を訪れた。雨であった。

雨の松本にて

遠く来て信濃に山のない日なり

路郎

朝空に雨は無帽の師を迎へ

民郎

この句が生れた。私は松本で川柳展覧会を開き、路郎師にも観て貰い、松本の川柳家と座談会を開くことにしていた。大勢集った。終始、にこやかに川柳を語り、雑誌を語った。

浅間温泉に案内した。ゆっくり信濃の秋色をたのしんでおられたようだった。

昭和十二年一月、「川柳しなの」を創刊した。題字を快く揮毫していただいた。君は瘦せっぽちだから、題字もスラリつとしていと註を附けられた。なるほどスマートであった。

「川柳雑誌」に關係しながら私は「川柳しなの」を主宰して来た。私はだんだん「川柳雑誌」に句を発表しなくなった。路郎師はそれを許してくれた。「川柳しなの」で私が元気であることを見守ってくれたからである。

昭和十六年冬、私は句集「大空」を梓した。発行所は不朽洞

であった。序文を路郎師から書いて貰った。装幀は小林朝治の版画、関野準一郎の挿画である。いずれも私の知人、小林すでに近く、その版画の異彩は愛好家にとっていまでも愛惜おく能わざるものがある。関野は健在、版画で大いに名を挙げておられる。

路郎師が雑誌奉還を宣言され、その報告旁々松本に寄られたとき浅間温泉でくつろいでいたのだ。終戦少し前であった。

私も「川柳しの」の廃刊を命じられて一時空白時代がつづいた。昭和二十一年に復刊、全国いたるところ漸次、川柳誌が芽を吹き上げていった。

静岡の榎田竹林さんが全国川柳大会を計画され、私も選者を頼まれたので出掛け。そのとき路郎師と会った。相変らずお元気であった。水府さん、紋太さん、三太郎さん、鞍馬さんたちも来られた。大会がすんで翌朝早く路郎師は病床にある福田山雨楼さんを見舞うべく横浜に赴かれた。私はただ一人駅まで見送りに行った。昭和二十七年五月のことであった。

なおこの大会で選者になっていた五花村さん、鶴丸さん、迷亭さん、盈光さん、雀郎さんはいま近い。その後、昭和三十三年一月、上阪して病床の路郎師と会った。減

多に人に会わないという病状であ

ったが、特に無理をしていろいろ語り合った。君、「番傘」の大会に

来たのだねと看破された。「番傘」の磯野いきむさんが一月二日に私のところに訪ねてくれたが、どうだ、大阪へ来ないかとすすめてくれた。五十年を記念して大手前会館で開催、私は席題の選者を引受けた。雀郎さんも健在でいられた頃だ。

私は大阪から離れているので、「番傘」の方とは手紙で交際した。水府さんとも同じ川柳畑の大先輩としてつきあいをした。「川柳雑誌」と「番傘」は二大雑誌であるので、私は席を持つ「川柳雑誌」だけを固執することが本来だが、「川柳しの」を主宰していたし、大きく川柳界を眺めて考えるとき、どうも孤絶というわけにはいかなかった。

そういう私の立場を許してくださった路郎師の寛大な気持が尊く、そして涙が出るほど嬉しかった。

一枚一枚紙をはぐように快方に向われていった路郎師は、蔑乃奥様と同道で信州路に入られるお知らせを得た。実は昭和三十三年一月におうかがいしたとき、蔑乃さんが信州に長く憧れているとききに私に言った。それが実現し

たのである。昭和三十四年九月のこと。

湯田中の中島繁知郎さんの無心庵に長く滞在、こよなくも信州の風物に接しられたのであった。その帰途、お二人で松本に立寄られた。早速、浅間温泉におつれし、

よもやまの話を花が咲いた。そのとき「川柳雑誌」の後継ということをしみじみ語られた。重大なことで、とかく私の口巾つたいことを洩らすべきことがらではなかったが、私の育んでくれた「川柳雑誌」の遠い将来についていささか関心を寄せないわけにはいかなかった。

深刻な話のほかでは、信州路へ入った一休みを木曾福島でおちつき、その宿屋で講習のあった木曾踊を早速、蔑乃奥様は熟得なされて一ト自慢されたり、信州の漬物のうまさなどが二人して口を合

わされたことであつた。その後「川柳まつり」をやるから猛夏で大変だろうが来てくれな

いかというお手紙をいただいた。どんなことをしても出掛けようと思

い立った。昭和七年五月に初めて私が路郎師に会って以来の「川柳雑誌」の大会だからだ。昭和七

年のときも、この「川柳まつり」のときも、上阪については橋本緑雨さんにいろいろお骨折をいただ

いた。どちらも宿泊の労をとって下さったが、それも深い縁だという

とき麻生路郎という名前がありあり浮び出るのである。

昭和三十八年七月七日、難波の北極星でその「川柳まつり」は行

私の今日あるのも路郎という厳格な、それでいて温容あふれるばかりの肌合いに培われたおかげであると考える。

私には新しい人たちがかりであつた。こうして続々と川柳家を育ててゆく手腕と努力を目のあたりに見るようであつた。

既にその人はいない。しかし胸像を傍らにし、じっと目を閉じて来し方を顧みるとき、思い出は尽きないけれど、なお思うことはこのうえとも川柳への情熱を失うことがあつてはならないということである。

まことになごやかに、きらびやかに「食い倒れ」の土性骨の看板のある繁華街のなかでスムーズに運んでいった。あと懇親会があり、微笑をもつてみんなの談笑をじっと眺められていた路郎師のお

もかが私の心のなかでよみがえってくる。

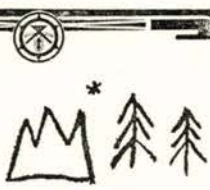
思えば長いおつきあいであつた。私がこうして川柳に志すことが出来たのも、その揺籃時代をき

つ、しかもあたたかに見護つて下さったおかげである。何かと川柳の名が出るたびに、ああ拙いけれど私も川柳家だと思

い、そして初心時代を振り返る。その

生涯に川柳の壁どんと来い

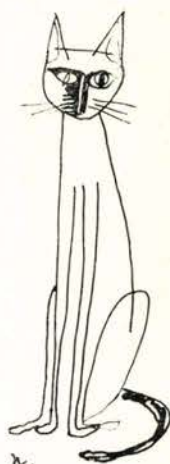
民 郎



六甲山ホテルの ジンギスカン鍋

500人収容の設備を増設
百万ドルの夜景を眺めながら
味わう豪快な焼肉料理ノ
●お1人様1000円から
●阪急六甲駅から登山バス
(30分80円)又はタクシーへ
お問合せは、阪急交通社へ

一路集



釣 銭

小西無鬼選

釣銭要らぬ方から阿弥陀集められ
釣銭いらぬように罰金持つて来る 代仕男
出しようがある釣銭で客を寄せ 淀月
千円の釣銭で朝から市電もめ 伊津志
釣銭を煙草屋頭出して呼び 春已
一円の釣銭も会計貰つとき 木魚
アルミ貨を切らして端数はまけて置き 光郎
釣銭位用意しとけと捨台詞 雄声
釣銭の正直さがす投書欄 八九寸
釣銭でうどんを喰べる女づれ 李鳥
釣のない窓口黙って突き返し 井蛙
釣銭が欲しゆて煙草一個買い 藤波
釣銭は返らず偽札もつてかれ 宗太郎
おい釣があると暴力団すごみ 李朋
一万円も一度釣銭数えてみ 万竿
釣銭をきつちりとしてバーを出る 愛鳩

釣銭がなく最後まで立たされる 芳子
釣銭を倍にする気のバチンコ屋 酔夢
釣銭をかぞえず大物らしく見せ 雄々
釣銭をほとり落して児が眠り 隆史
釣銭の小銭はたいした串かつ屋 鶴丸
釣銭をもらう嬉しい手がふれる どんたく
アルバイトの正直追うて来て釣渡し 勝子
釣銭を駅員恵む様に呉れ 不二
駄菓子屋が一万円にお詫びする 旭峯
釣銭も忘れる程の長話 与志
アルミ貨の釣抽斗に忘れられ 涼人
釣銭に記念貨幣が光ってる 隆子
釣銭の指に見とれて銭こぼし 同
へそくりの小銭もたて出すお釣 静水
釣銭はへそくりにする家計簿 務
集金人手品のように釣を出し 恵二朗
釣銭がなくて余分に買わせられ 秋星
釣銭をよまず帰った身の不覚 歌子
釣銭を貰うに恐いような紙幣 千久

五 客

植 木

吉田圭井堂選

植木市露地の奥まで巾をとり 弘生
垣根からお茶誘い合う植木趣味 代仕男
うしろ手も真似て坊やも植木見る 伊津志
飛んできたガール大事な枝を折り 淀月
アパートに越しても植木五六鉢 同
植木屋の一枝切つて昼にする 可住
ベランダの庭師手入れも床屋なみ 繁太郎
貸鉢の植木瀕死で戻って来 春已
留守中を猫と盆栽頼まれる 木魚
すねかたがまた一段と鉢の松 光郎
新築の庭へおろした鉢の松 静水
まっすぐに伸びたい植木さいなまれ 勝子
植木まで添えて嬉しいのれん分け 鶴丸
ひねくれた植木へババは目を細め どんたく
十円のトコで鉢植折れ合わず 隆史
丹精を込めた植木へ惚れくと 松風
家柄をデンと示して植木鉢 芳子
植木鉢と共に嬉しい退院日 同
植木などきけてほろ酔いベルを押し 万竿

釣銭がなくてしばらく店の番 ろ亭
値切るだけ値切り釣取る札を出し 章雅
釣銭は呉れず女につねられる 千翁
人
払わせて釣銭だけは妻がとり 芳子
地
釣銭を九百八十円也出させ 恵二朗
天
うちもろとくわと釣銭へ悪びれず 可住

妻の愚痴背に水をやる植木鉢 晃男
植木鉢大会場に小さ過ぎる 藤波
客の顔見て植木屋の値がきまり 八九寸
おむつ竿支えて梅の咲きはこり 同
植木だけでもとボロ家買わせる 雄声
愛玩の植木も棺に入れてやり 千翁
どの顔もまけるのを待つ植木市 隆子
三代の歴史を語る庭の松 千久良
枝振りにも惚れて根のない植木買 通隆
記念樹を植えてあれからまだ会えず 旭峯
植木買うゆとり都会の隅に生き 務
外交員植木を貰めてから名刺 秋星
婚礼も近し植木屋も出入り 井蛙
へそ曲り植木にさえも個性見せ 不二
停年を慰めている植木鉢 同
また枯らす迄を楽しむ植木鉢 涼人
植木鉢松の根性ありつたけ 雄々
記念樹を仰ぎ昔をなつかしむ たけお
先代の残した植木持て余す 宗太郎
植木市のぞいて庭がはしくなり 章雅
宮様は一鉢だけの植樹祭 李朋
植木鉢左遷を知らぬ花ざかり 同
鉢が又増えて退院まだ出来ず 同
佳句
また枯らす植木を買って叱られる 愛鳩
はらくする程植木屋鉢入れ 杏花
植木職今も草履がよく似合い 章雅
席蹴つて植木鉢のまだ震るえ 与志
頑固だが腕が物云う庭師なり 歌子
植木もうチャングルめいて斜陽族 恵二朗
人
植木屋の邪魔しに隠居やつて来る どんたく

地

植木屋の云うた通りにして枯らし 宗太郎

天

自分なら此処へ植えたい人の庭 李鳥

小説

工藤甲吉選

小説を読んで宿直料稼ぎ 静水
 小説のとりこにされている若さ 愛鳩
 小説家身の上話持ち込まれ 酔夢
 捕物帳 養老院は秋深し 李朋
 小説の主人公ぶるあはらしさ 隆子
 すれ違いばかり小説腹が立ち 杏花
 小説のクライマックス以下次号 旭峯
 小説をまねて妻の座すべり落ち 歌子

ヒロインの危機は次号に持ち越され 代仕男

小説に泣く純情を持ち合わせ 同

推理小説留守居の夜が怖くなり 光郎

俗人に興味が薄い直木賞 涼人

その過去を小説にして稼いで どんたく

いやらしい小説も出る旅靴 雄々

小説は決つたようにすれ違い 松風

闘病も小説はいいほどになり 雄声

偶然が多過ぎドラマ阿呆らしい 八九寸

行き過ぎた小説悪の芽を育て 井蛙

小説の位置図書館の隅で読み 千翁

小説で習つたらしい妻の知恵 藤波

小説を借りて守衛は出勤し 宗太郎

小説も好みが違う兄おとと 不二

小説にならぬ夫へ腹を立て 可住

恋愛小説みんな同んなじような筋 秋星

五客

小説が好きで立読みやめられず 淀月

小説の最後はやはり添いとげる 芳子

小説の佳境に邪魔な客が来る 光郎

十七才推理小説読み耽ける 光道

小説のモデルしなびてインタビュ 宗太郎

小説家志望ふろしき一つさげ 恵二朗

ヒロインを案じ夕刊待ち怠びる 万竿

推理小説二、三人殺される 通隆

小説は先ず第一に恋をする

軸

る。相続いで巨匠を失つたことは柳界のため痛惜にたえない。

氏は川柳生活五十六年、関西柳壇の重鎮として活躍された。三重県鳥羽に生まれ、大阪成器商業卒、大阪貯金支局に就職後、関西川柳社に参加、西田当百氏に師事した。大正二年「番傘」を創刊、のち会長となり現在にいたる。その間、桃谷順天館、福助足袋、寿屋、グリコ等に在籍、昭和二十二年大阪府文化賞を受賞、三十八年「番傘」五十五周年を記念し「類題別番傘川柳一万句集」を出版、ほかに著書「川柳手習」「川柳当百集」などがある。



番傘本社社長 岸本水府氏逝く

兼ねて入院、療養されていた番傘本社社長の岸本水府氏は八月六日午前十時二十九分、胃ガンのため大阪市城東病院で死去された。本名岸本竜郎。七十三才。

柳、菊沢小松園が弔問、葬儀には中島生々庵、麻生アイト外多数参列、故人の冥福を祈った。

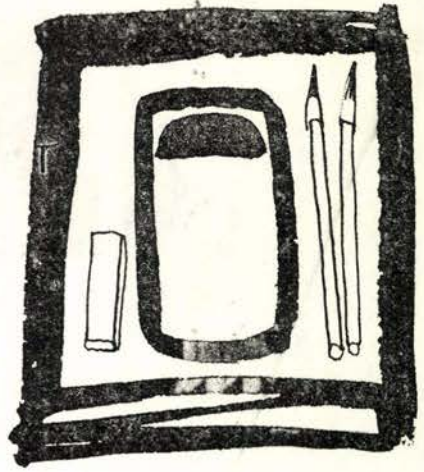
思えば七月七日、本社主幹を送つて一ヶ月、奇しくもその追悼句会の日に逝かれたのである。同じ道に志し、若いころからの水い交遊であっただけに不思議と云えば不思議な思いに打たれるのである。

麻生路郎先生作品頒布についてお詫び

先きに路郎先生の喜寿、金婚祝賀行事として、先生の作品頒布のお知らせをいたしました処、多数の御申込みを受けました。この機会に先生の作品を残したい所存でありましたが、既にご健康状態が思わしくなく、その後間もなく病を得られてご入院されましたことはご承知の通りであります。先生は常にこのことを気にされて、「返金をすれば済むことではないから」と申しておられ「早く退院をして揮毫もせねばもう永くは持つまい」と、もたらされていたそうです。然し病状は思わしくなく小康を得られることもなく、お亡くなりになりました。誠に申し訳のないことながら右の次第御諒承賜わりましてお許し下さるようお願い申し上げます。尚お申込みの金額は郵送にてご返金申上げましたが、万一不着の節は何卒お申出下さいますようお願い申し上げます。

川柳不朽洞会

北川 春 巢
 松江 梅 里
 川村 好 郎
 西尾 榮
 若本 多 久 志



先生路郎噫

○ 阿部 佐保蘭

七月八日の朝、三味先生より電話で路郎先生が昨夜亡くなられ、

九日午後一時より自宅にて告別式を営むとの段、乃夫人よりの電話の趣きを聞かされ愕然としてなすところを知らず、身辺の整理をして明日のひかりで参列すべく東京駅へ問合せた処、運よくひかり三号が今なら残っているとので、武蔵庵へ電話した処、大阪からの電話で明日は身内の方だけで十八日午後二時より川柳雑誌社及川柳不朽洞会の合同葬が行われるとのことと十八日のひかりで参列することとに決める。仏壇に御線香をあげ、先生の御冥福を祈り、三年前の七月二十六日に渋谷永川町報恩舎にて小生の為録音して戴いたテープをかけて、在りし日の御元氣だった先生を偲ぶことにした。

このテープはその当時随行された薫風子君（今の薫風）と女さんも傍に居られて御存知のことと思うが、先生も御機嫌よく、小生の突然の願いを心よくうけ入れて下され、先生の句集旅人より左の十句を自選して朗読して下さいました。

二階を降りてどこへ行く身ぞ寝転べば畳一帖ふさぐのみ
春の僕ただ良寛をこころざす
凡聖一如元旦のころ知る
春の草代議士などに踏まれるな
古くとも僕には仁義礼智信

還 曆

六十一まだ情熱はもえにもえ
台風のあんな力が欲しくなり

人類は悲しからずや左派と右派

啄木祭に

ああ僕も汽車を下りしにゆくと
ころなし

この最初の句は昭和九年一月に発行された昭和川柳百人一句の中にも第四番目に選ばれているから、よっぽどお気に入りと思われ。他の九句は今回新しく選ばれたもので百人一句の中には見当らず、二十九年たつと、かく変わるものと興味深く思われるものである。

この川柳朗読に当たっても先生の慎重さは現われ、小生が最初うっかり、あざぶじろう先生の川柳朗読と申しあげたところ、待ったをされ、あそうじろうと訂正して下さいました。最初の朗読は莊重に声も大きかったが、寝ころべばの句がうまく行かず、春の僕の句も一寸言い間違えられたので、一応最後迄やってからやり直しをされ、二回目には割合に早く間違ひもなく吹込まれた。この時に先生は同時に昭和川柳百人一句より、段乃先生の左の五句を選ばれ朗読して下さいました。

のんではし止めてもほしい酒をつぎ
ヒヤシンスの音沙汰でなしパンのこと
へちまへちまこは行水すると

ころ

浴槽へずり立ったは皆わが子

風鈴の正体ガラスとは淋し

尚之に加えるに須崎豆秋氏が作

詞せられた川柳祭の唄を解説付で

一番から三番まで、吹込んで下さ

った。そう云うところにも、先生の

奥様並びにその愛弟子への愛情が

覗えて涙ぐましいものがある。私

はこの先生の自選十句を折を見て

その当時学習院教授だったRHプ

ライス先生に英訳して戴くつもり

でいたのであるが、先生が遠方の

大磯に移られ、且つその著作に超

多忙でいられた為、その機を得

ず、その御無理が禍したのか昨年

オリンピックス中に急逝され、そ

の願いも空しくなったことを今以

って残念に存じています。

この外に小生は昭和三十八年四

月二十四日に拙著川柳句集「鶴の

姿」の序文をお願いに不朽洞をは

るばる訪ねた時の先生を中心に段

乃奥様、薫風君、林安子さんをま

じえた和やかな風景を録音した

もの、並びにその後先生が川上三

太郎先生の病氣見舞に上京された

際、三味先生の武蔵庵での対談

風景をテープにとったものと合せ

て三本テープを所蔵しているの

であるが、他の二本は又の機会に譲

先生を偲ぶよすがとしていつ迄

も家宝として大切に保存させて戴

くつもりである。小生が先生に始

めてお目にかかったのは昭和八年

八月西成区玉出本通三丁目の喫茶

店キング（当時奥様が経営さ

る）で「川柳雑誌」に投稿してい

たのはそれ以前であるから先生

とのつながりは三十五年以上にな

る。拙著「鶴の姿」の序文にもあ

る通り、先生は小生が一生をかけ

て努力して来た川柳翻訳の仕事に

とり分けて深い理解を示され、貴

重な「川柳雑誌」のスペースを惜

しみなく割いて下さった。その先

見の明と川柳に対する愛情には只

只頭を下げるばかり、感謝の言葉

を知らないものである。川柳翻訳研

究会がかかる慈父にも勝る顧問を

失ったことは一大痛恨事と云うべ

きで残念でなりません。重ねて哀

悼の意を表し先生の御冥福を心か

ら折って止みません。

今はもう恩師は遙か雲の上

佐保蘭

○ 正本 水客

昭和十四年であったか、西日本鉄道人川柳大会第一回が尾道で開かれたとき、先生と某人君と三人で会の翌日、海の見える麻生家の墓所にもうで、辺りの草取りをしたときの空の色がまだ眼の底に

残っている。

×

昭和二十四年の春、戦時中とだえていた大会の第六回として城崎温泉に復活した、当時不可能視されていた路郎、水府、紋太三先生の顔を揃えた豪華な集りであった。しかも先生は体の不調を押しての御出席で、柳話を済ますと直ぐ床をとって貰って、その中で選句、被講は水客が代理を仰せつかる状態で心配したが、翌朝は気分もすっかりよくなられ、二人で早朝のまんだら湯へ出掛けて行って肩も流していただいた。温泉でおかゆばかりを召し上がりはその時の句である。

○ 菊沢 小松園

今日は気分もよから上って呉れとの先生からの御言葉にもうお会い出来ないかも知れないと思っていた私は二階の病室へ通された。ベットのの上に身を横にしておられた先生は想像していたより元氣そうであつたが瘦せ細られたお顔や御体、黄疸が出て濃い黄色の御顔は殆ど橙色に近かつた、お声も弱々しかった。其処には、かつての川柳界の爆弾男としての演壇に獅子吼されたあの当時、往年の面影は窺うすべなかつた。病院のこと、家庭のこと、川柳のこと

割合によく喋られた。後で御疲れが出て御体に障ってはと思ひ、早く辞そうとする心と或いはこれが三十年に余る師弟の今生での、最後になるかも知れないと思う心が交錯して、意外に時間が延びた。

「先生そうして寝ておられて句は出来ましたか」

と、御尋したら私の思ひをすぐ察しられたか

「辞世の句と言うものは、なかなか出来んもんや、君も達者な間に儲らえとかんとあかねで」と、気持好きそうに笑われた。

近年足が弱くなられて、句会場が二階などの時、よく手を執り、肩をお貸したが、もう御体に触れることも無いであらうと思つて「先生手もこんなに黄色ですなあ」と、それとなく触れて見た。

皆んなあれの色が廻つとるのやと又笑われた。その為、まだ仕達げて置かねばならぬことが沢山あるのに大分残したと必々言われたのは、この病を得た老詩人の尚且つ燃える精神力には、たゞく頭が下る思ひだった。

句日を出でず、訃報を聞く、遂に幽明境を距て、今は亡く、悠久不滅の自然の懷ろに還られた先生の面影は、永久に我々の胸のうちに在り、一生を賭して、柳界に

残された大きな足跡は永遠に生き続けることであらう。

○ 西尾 栗

青年路郎!! この言葉は、恩師路郎先生の壮年時代より、中年、老年時代の最近迄の、先生に奉った、言葉で、あの筋骨質のスマートな端麗な容姿から受ける感じと、内に秘めた旺盛なフアイトと、文学に対する炎のような情熱とは、正に自他共に許す、路郎先生にふさわしい、青年の二字の尊称であつた。こんなに、万年青年の若々しい、先生との度永遠にお別れしなければならなくなつたことは、誠に不思議な夢のような思ひであります。私が、先生に初めて、お目にかゝつたのは、今から丁度三十四年以前の昭和六年七月二十五日の天神祭の晩でした。その晩が、阪大川柳会の創めて開かれた晩だったのです。爾来十有余年、阪大川柳会を指導されました。阪大川柳会には、時の名譽教授長崎柳秀先生。同じく笠原路生先生を初め、現在国立病院院長の布施筑川先生、警察病院院長の井上湧三先生等、教授、助教授の先生許りでしたが、路郎先生には、句の上では絶対に妥協されることなく、こちらできいていても、ひやひやする位ビシ／＼と意見を通

しておられるのを感じてきいておりました。先生は川柳を教えると同時に、信念をも教えて下さいました。今更ながら、私達が、先生を慕い、先生に帰依するところのものは、この強い意志と信念にあつたのだとつくづく思ひ起している次第であります。

○ 若本 多志志

私が川柳の道に入った初歩の頃から、手ほどき、添削といろいろ指導して下さい、金沢の安川久留美師が

竜天に登る兆や雲の色

という句を残してあの陋屋に奇人の生涯を終えられたのが、丁度、八年前の春もまだ寒い頃、今又「川柳は人間陶冶の詩」である、と、必々教えて頂いた路郎先生が

雲の峯とい

う手もあり

さらば

さ

らばです

という句を残

して、あの世

への旅人とし

て逝つてしま

われた。

愛別離苦の

悲しみもさる

ことながら、

何を選んでいただくかは先様におねがいして
タカシマヤの商品券を
お贈りするのにも心に
くい贈物かと存じます

一〇〇〇円から
一〇〇〇〇円迄
大阪・東京・京都
3店に共通です

高島屋

なんば本町
大阪・東京・京都
高島屋

私にとってこの二人の師がいずれも、その辞世の句に於て、自ら昇天の意を顕しておられることに、大変感銘を受けたのである。安心立命というか、悟りというか、そうした心境に終始した人生、実に尊い教えをその句に感じさせられると共に、余命十年もないこの自分が果して臨終までに、その心境に到達することが出来るであらうかと、危惧する次第である。

○ 浜田 久米雄

思い出は果てしなくつづく、兵庫・広鉄局・岡山・備前の各支部の創立と育成。七回にわたって開

最後に、私の好きな路郎師の句寝転べば畳一帖ふさぐのみを三詠して静かに恩師のご冥福を祈るばかりである。

催された西日本鉄道人川柳大会、岡山県弓削町での西日本川柳大会、山陽新聞社主催の読者川柳大会、弓削駅前と吉永町の句碑の建立、その他各種の催しには必ず先生のお顔があった。私は先生をお招きし先生について歩き回ったのである。

特にご苦勞をおかけしたのは私の句集「凡人」の発行であった。序文から印刷、校正、紹介などすべて先生まで私は折時よろしくお願いしますとの便りを出すだけであった。先生の序文をいたいた句集はおそらく私の句集「凡人」が最後となってしまったので

はなからうか、お骨折りを思う時先生に對してまことに相すまない気持ちに責められる今日である。

七月九日は宮島で開催される第九回全国鉄川柳人連盟大会へ出場する日であったが妻がだまって指さす山陽新聞の片隅に思いもかけぬ先生の訃報が十三行の活字によって組まれていた。私は全身から力が抜け出して行くのをしじみじみと感じたのであった。あまりにも厳しい自然の法理である。弔電を打ちに行く途中で川柳をやっていない二三の人からお悔みの言葉を受けて私は眼頭を熱くして郵便局でペンをとったのである。

思えば永い先生とのつながりであった。私の人生の半分以上は国鉄生活であり川柳生活であった。

川柳によって結ばれた師弟愛、川柳によって結ばれた川柳人同志の魂の交換によって私はわが人生をたのしく過し意義ある毎日を送ることができたのである。その先生は今では亡し、あの温容に接することができない淋しさがひし／＼と身に迫って来るのである。

けれども先生のご遺訓は私の人生のある限り消え失せることはない。川柳とともに歩いて行く私の余生はいのちある限りつつけられるであらう。

麻生路郎先生へ

東野 大八



路郎先生―現世の風の中で、この親友下野隆一が死んだとき、そいか知りませんが、私は川維六月うして呼ぶことがもうできなくなの電報片手に家中一ぱいの声をは号の不朽洞句帳をみたとき、ギョりあけて私は号泣したことを妻がツとなって、肌を寒くしました。

先生がお亡くなりになった電報を頂いたのは、その日の夜でありました。家内が、娘たちと相談して、私の潮どきのいいときを見計らって出すことにしたからです。私

そんなことをいってよいか悪

そのわけはこうなのです。それともう一つ、二むかしも昔

先生の第四句碑

ふるくとも僕には仁義礼智信

路郎

はわが吉永町にある。私も先生の句碑の横に五年先の還歴を記念して私の句碑を建立させて頂くことにしている。けれどもその句碑に刻む「いのちある句」が五年間に創れるかどうか。私は先生のご遺訓を守って川柳に精進することをお誓いするものである。

○ 橘高薫風

五月二十日、不朽洞へ原稿整理に。腹乃先生に句集刊行の意志を述べ、機を見て路郎先生にご相談戴くようお願いする。夜、辞去する直前、路郎先生からお呼びがあり、二階の病室へ伺うと、「序文を書こう、印刷所との交渉もしてあげよう、他はすべて君がやるんだ。」と仰言って、「先日の寿司はおいしかった。退院して始めて飯を食った気分になれたよ。」と鮎万の雀ずしを喜んで戴けた。塚越迷亭氏の急逝を例に、人の生命のはかなさに触れられ、句集刊行は迅速に励まされる。即日のお許しありがたし。

五月二十五日(火)路郎先生より序文を戴く。銀行の小さなメモに万年筆で書かれてあった。

視野無限

この言葉に尽く
昭和四十年初夏のころ

病床に臥す 麻生路郎識

先生に甘える日頃の悪い癖が出て、つい「不朽洞の病室にて」の方がよろしいと思う旨申し上げたら、「そうだなあ。」とあっさり書き直された。こんなことは珍らしい。常識的でなまぬるい表現にしてしまったかと、後後氣に病むことしきりである。

五月二十九日、不朽洞へ。句稿完成し、序文、あとがきを清記して表紙の画と共に持参。「檸檬」と題す。路郎先生は、第一頁の恋の句を他の適当な句と入れ替えようと注意をされた以外は総て可とされる。嬉しかった。三十一日に印刷所と交渉して下さる予定と。

六月二日(水)不朽洞へ。著者近影の写真版作成を製版所に依頼す。先生から印刷所との話し合いの経過などを伺う。

六月七日、九日、十五日、十九日、二十三日、二十五日、不朽洞へ、不朽洞へ、が日記に続く。この間、梅雨が執拗に続いていて健康な者でさえ身体がだるい。先生はいつも腹乃先生に灸をすえてもらっておられた。

七月二日(金)不朽洞へ。病室で路郎先生、林宏子さんと句集の最終打ち合わせ。梅雨のせいか先

先生に初めてお目にかゝったの
を忘れた先生の正面が胸の裏に
焼きついている。

○ 大坂 形水

○大坂形水

は三十年余も前のことである。

当時の川柳雑誌社は、筑前橋南端の昭和ビル内にあった。一階の道路に面した小さな一室で、看板がわりの大きな標札が掲げられていた。——或る日、亜鈍君と二人で訪ねて行ったのである。近作柳梅へ投句しだして一年目ぐらいのときだった。雑誌を通じて知る路郎先生は、小生等には大芸術家であり、大詩人である。ドアの前に立つと、胸の動悸と、カッと上気するのを意識した。亜鈍についでドアを開けてみて、想像に反したあまりにも小さい事務所に一瞬けんな感があった。しかし狭い室の気易さに、かえってほっとして堅くなっていた心もほぐれ、時間を忘れて先生の話術に魅せられてしまった。

それから以後は亜鈍とともに、川柳雑誌、路郎ファンになってしまった。暇をみつければ、亜鈍と二人でよく編集の邪魔をしに行ったものである。先生もまたお仕事の手を休めては、時間をかまわず吾々の話し相手になってくださった。いつもきまったように、隣りの「玉一」からミルクコーヒを取って、それを奈那ちゃんが出してくれた。当時の奈那ちゃんは十四、五才ぐらいだったか、お下げに着物がよく似合っていた。

また、小生が主家を別家して独立開業した時、(昭和十五年)

「大坂君の商戦前途を祝して」と題して、『足踏をすな』の見事な額を贈ってくださった。小生にはうってつけの良い座右の銘として、二十五年の長い歳月を、戦災の難からもまぬがれてきて、今も当社の応接間を飾っている。

昨年の十二月六日でした。当社のビル竣工記念に、さ、やかな催しをしたとき先生にも、わざわざ老体をお運びいただき、「うれしきは足ふみをせぬ君なりし」の立派な色紙をご持参くださった。そしてパーティの席にも出て来られ、心から喜んでいただいた。

小生も終戦後は世俗に追われるまに、作句から遠のいてしまっただが、川柳雑誌は毎号楽しんで読ませていただいております。先生からも変らぬご交際をさせていただいてきた。ご病気の由を知らぬのはなかったのだが、まさか死なれるとは思いませんでした。小生のイメージには、強気、情熱、の先生しかなかった。まさに人の世の無常というほかない。

今にして思うことは、ご生存中に、なぜ、早く川柳塔へ復活しておかなかったか、なぜ、先生の選を受けておかなかったか、たゞそのことだけが、たまたまに残念

で、悔まれてしかたがない。「孝行のしたい時には親がない」文字通りそのような気持ちである。

○ 野村 味平

川柳雑誌の創刊四百号記念祝賀会に出席のために、私は十幾年振りで上阪した。祝賀会も終って、懇親宴に移って酒宴も酣になった頃、路郎師と円卓を囲むことになって師と始めて隣り合ってしまった。私は多弁になって、青年時代に信仰の門を敲いて、只管に求道したものであるが、川柳を作句するようになって、先生のご指導を受けるようにになってからは、神仏の信仰の道では、到底、擱めなかつた。実社会の真理に触れることが出来たことを、甚だ嬉しく思うとお礼を申上げた。談話は、これからの社会生活、経済問題、日本国のありかたについての可成な突き進んだ見通しにまで話がはずみ、先生には、一つ一つ頷かれていたが、その折りに「川柳雑誌」の刊行は僕一代で終らんと明確に意志を述べられて、味平のおんぼろ川柳と言って笑っておられた。私は、川柳の作句の難しいことを申し上げて、先生には長寿であると推定はするけれども、ひよっ

としたら私よりも先きに、ご他界のことがあった際には、私には川柳は作句することが出来なくなるでしようと思し上げたと思っている。

それからはビールが這入るに従って、歌って踊っての賑やかさで、最後が、阿弥陀経を、円卓の周囲にいた各位で、読経したが、先生も、声静かに読経しておられた。一同で有難がってお開きとはなつたが、私は、この次ぎに上阪する際には、必ず不朽洞へお伺いさせて貰いますと申上げた切りで、ご生前に果たせなかつたことを、唯一の残念なことに思っている。何故に、再上阪することを、私は、慌てなかつたかと言え、先生には、長寿で、八十才過ぎまでは大丈夫だと思つたからで、ご全癒せられるものと確く信じて疑わなかつたのが、これは、私の慾目であつた。

明日を信ずることは出来ない。私には、言い尽すことの知れない淋しさで、これ以上には、拙文を書き進めることが出来なくなつた。

○ 若柳 潮花

黄昏の薄陽するなかに、音もなく先生の死を悲しむかのように、愉快になつて笑つたこともあつ

食品と原資材機械包装の総合誌

食品と科学

Food Science

本社 大阪市北区源蔵町 5 (361) 9373 代
支局 東京都千代田区神田鍛冶町 2 (252) 4941 代
名古屋市中昭和区村田町 2 (88) 9069

霧のような雨が団地の柳の葉を濡らしている。私の空虚な、そして何となく落ち着きを失った眼のなかにありし日の先生の傍がハッキリと映って消えない。川柳を通しての私の私生活の上に於ても、先生の思い出は、あまりにも多かった。戦前戦後を通して多くの思い出の中に先生を異境の地へ波止場にお送りした日のことは今もはっきりと残っている。

先生とお逢いした最後の日は三月一日だった。編集室の襖を背にされた先生とお忙しくいられた腹乃奥様とで川柳を通した舞踊についていろいろと可成りの時間お話しをした。もう十年もたつていると思うが、先生に、権平が種まくを教えて呉れと言われてお教えしたことがあった。尻を端折って面白そうに踊られる先生を見て愉快になつて笑つたこともあつ

た。

私が戦前の西川流から、戦後若柳流に変わって本格的な日舞を学ぶ様になった時に、先生は君ならやれると励まして下さった。そして君が若柳流の名取りになったら、潮花をそのまゝ、日舞の名として若柳潮花とするといひ、と言われた。若い頃の又一郎の踊りは多かいい踊りだったが、君の踊りも多か過ぎる。君は女舞をするといひ。男が舞う女舞を見事に舞ひこなせば成功だ。僕も踊りの資料は集めてやろうと言つて頂いた。先生には本当に長い間、色いろとお世話をおかけして参りました。不肖の子としての私は長い間見て頂きましした川柳を大切に何時の日か先生のおそばに逝く時が来ましたら、お世話をおかけしました「三人句集」を抱いて舞扇で賑かに参ります。また其の時は大きな声で叱つて下さい。青い水銀灯の光りに雨に濡れた柳の葉が揺れている。

佛を見詰めていたら泣いていた。

○ 児島 与呂志

大正十三年二月十五日創刊された川柳雑誌という事から、大正十一年生れの私が三才の幼児の時、昭和十一年七月路郎先生が川柳職業人を宣言されたと言ふ事から、

二年制の実業学校を卒業して社会に第一歩を印した時、そのように考えると私の生活のそのまゝの年次を振り返えらされる「川柳雑誌」だったのに。

昭和三十六年の川柳雑誌一月号に北川春巢先生は私の句風は行動の柳人であると評して下さいた事がある。私自身詩的要素も学才も無い事は承知で現実ありのまゝ、作句し、日誌の川柳であると自慢をしている。路郎先生も曾孫弟子にこんな奴がいた事を腹立たしく思われていた事と思う。

私は昭和二十五年十二月川柳大阪の忘年句会で初めて路郎先生のお顔を拝見しまして、勿論先生自身は御存じなくお話も致しませんでした。それだけで憶面もなく「先生の茨路つぎてわれ行かん」とそれもハガキでお送りしました。翌日とにかく長く続けて努力せよ前進せよとの意味の返書を頂戴しました。鬼の首でも取ったような喜び、私の川柳一途の邁進はその時に決まったのだ。

川柳雑誌の先輩諸先生に教えられ、橋本縁雨先生、北川春巢先生、富岡淡舟先生はじめ諸先輩の築かれた川柳大阪のお陰で、まですて、川柳大阪の編集を引き受けてこれからの時、先生の死に合ひ、悲しみは深く一人こらえる涙

があふれて来るのです。

しかし悲しみを乗り越え、「いのちある句をつくれ」のお言葉を大切に胸にききみ、柳道の前進に力をそぐ事こそ先生への御恩返しだと思います。

まだそこで逢える気がする不朽洞

○ 水谷 竹荘

甘えたいような、親しみを感じさせて下さった先生、私にとってはお父さんと呼びたいような先生、何んでも相談のつて下さった先生、私が昔、料亭をしていた頃、香林氏を供につれてよく飲み酒を召上つて、ほろりと酔われて鉢巻をされて、足首をかゝえて、舟をこぐしぐさをして、野崎参りを唄われた先生の姿が、まさしく思い出される。又私が芝居好きであるが、先生も芝居が好きでよく話があったので先生のお供で映画や芝居見物にもよく行ったのも、なつかしい思い出である。近いうちに竹荘句集を発行する準備中で、先生の序文を頂けなくなったのが残念でならない。昔、竹荘居雑叢に頂いた序文を引用させて頂いて先生を偲ぶ事にしたいと思つてゐる。

○ 伊藤 茶仏

路郎先生の死を新聞で知り、生前に一度でも、お見舞をしておればと、心残りでなりません。

ご病氣と知りながら、毎月欠かさず発表される創作を拝見しこの道一筋に生きてこられた、先生の神通力と闘病生活の気骨に、もう一度の再起を祈願しておりました。

川柳雑誌社、不朽洞会合同の葬儀に参列させて頂いたことを、せめてもの慰めといたして居ります。

北川春巢葬儀委員長の弔辞は胸をつくものがあり、故人のご意志を尊重されたの「川柳雑誌」廃刊宣言も参列者一同の、いまさながらの偉大な路郎先生を失なつた実感としてこみ上げて参りました。不朽洞門下生を代表として弔辞を述べられた中島生々庵氏のお声は震え、過去のこと、医学者としての路郎先生闘病のことなど、路郎先生のかつての側近者であり、長らく先生の片腕として不朽洞会の理事長をされた氏の後姿に、私は落ちる涙を禁じ得ませんでした。六十年の交友に馳せ参ぜられた三太郎先生の弔辞は、悲しみが言葉

にならず巨星を送る実感が胸に迫る思いをいたしました。ここから麻生路郎先生のご冥福をお祈り申し上げます。

肉体よ さらばさらばと不朽洞 茶仏

○ 傍島 静馬

先生、生前の名句、名吟の数々は、著書「旅人」に、また、先生主宰の「川柳雑誌」不朽洞句帖を通じ、日ごろのご精進と情熱の結晶を、死の直前まで発表されていたので、自分はこれらの、生命ある一句一句に感銘し、大いに教えられたのである。

先生は、また、選句の名手でもあった。先生の選はそのご性格に

品質 優良

先カペン

TACHIKAWA PEN



タチカワペン
タチカワゼム
タチカワ画紙

大阪市東区常盤町一丁目十一番地
立川ペン先株式会社

似て、概ね厳選ではあったが、自分にはこの選に入ることが、最高の願望であり、喜びであった。そして、これを川柳を精進する拠りどころにしていたのであるが、いま急に、この大きな支柱を失い、体中の力が一度に抜け去ったような感じがするのである。

先生に、早晩斯くあることは予期しないではなかったが、余りにもその時期が早過ぎたのが残念だ。自分は先生のおかげで、川柳の道を教えてもらった。そして川柳の良さを知った。先生死によって、急に川柳をやめるようなことはないと思うが、何んとかうつろな感じで、ともすれば作句を怠りそうになるのをどうすることも出来ない。

どうか地下の先生、私のこの弱気をお叱り下さい。

○ 福田 丁路

十数年前の日誌を出して見ると初めて先生にお逢いした日の印象を「温情溢る、ばかり」「慈父に接する感じ」などと記している。その後度々お話しする機会を持ったが、昔と何等変ることなく御指導を賜ったのである。ところが近年公私共に多忙を極め、気にはかけながらお目にかゝる機会を得ず、遂に永遠にお別れすることに

なったのは、返す返すも残念であり、申訳ないことである。

先生は逝かれたが、先生によつてすこやかに育った川柳は永遠に滅びることはない。吾々も又先生のこの不滅の足跡をたどつて、先生の御意志を守り抜かねばならぬ。

目を閉じて必静めて師を想う

○ 丸川 初甫

毎日新聞の夕刊で麻生路郎先生がお亡くなりになりました。早速その夜は川柳雑誌一月号から六月号までを取り出して不朽洞句帖と柳樽室とを拝見致しながら私は静かに心の中でお通夜をさせて頂きました。孫弟子に当ります私には大きな思い出もそう数々はございませんが、昭和二十一年の大阪市民文化祭川柳大会のこと。

兼題「旅」正本水客先生選で旅費だけで済まぬ故郷へ遠ざかり

と云う句を作り秀句に入れて頂き、いよいよ川柳賞を頂きます。に最前線に出まして最敬礼を致しました。トタンにフラッシュが光つて一世一代の榮譽をここに、そんな気でフト我に返りました。その前に麻生路郎先生がにっこりと

笑つて居られました。私はもう一度最敬礼を致しました。先生は「よかったね。しっかりやって下さい」と頭を撫でる様にして励まして下さいました。やがて先生のご講演を拝聴、窓外は秋日和のよいお天気で菊花薫る誠に楽しい嬉しい文化祭でした。

それから十年ばかり後、私は正本水客先生に連れられて不朽洞會員にして頂きました御挨拶に初めて川柳雑誌社を訪問致しました。大きな書棚を背にされました先生はグレーの背広をお召しになって山と積まれました丁度その頃発行された「私達」の判を一々押しておられました。「木製の判と違つて石のハンコはエライ力が入ります」と笑われながら水客先生と色々なお話が交されておりました。横には腹乃先生が一冊一冊を丁寧に包装されながら、「婦人友の会へ入会して下さいね」と笑つておられました。おにぎやかな、お忙しい風景の中から、いよいよおいとまごいのお玄園で本棚の上の胸像の前で「これは仲々いいだろう僕はいつ死んでもこの胸像が生きている」面白い御冗談と笑いのうちに帰りました。そして只今改めて「この胸像が生きている」の御言葉を思い出しましてきつと先生はいつまでもいつまでも御胸像の

中で笑つておいでの事でございましょう。

○ 小西 無鬼

顧るに路郎先生と我が川柳篠山支部とは川柳傘下の支部の中に於て特に縁の深いものと思つてゐるし私個人にしても格別御慈愛御指導を辱うし、支部発展の為に特別御多忙の御身に不拘御指導御鞭撻を賜つてゐる。不肖の子篠山支部はこの御鴻恩に応へる事薄く洵に慙愧に堪えない次第である。

然し「いのちある句を創れ」の御教訓を心に銘記し、永久保存の優勝楯の下に月々の句会を人間陶冶の場として精進して恩師の高恩に幾分たりとも報い参らせる覚悟である。

○ 工藤 甲吉

大阪へ降りて師の居ない大阪は陽がありやなし

霊前で

俺に似よ似るなと在りし日の写真

×

いつだったか「来る、来る、来ると言いながらいったい君の来阪はいつになるのか。君が来ないのならいっそこちから出かけて行くぞ……」というおハガキを一度

いただいたことがあったが、こんどやつとのこと出かけて来たら師はすでになし。痛恨なんぞたえんというところ。いままらながら三年前の青森と東京の武蔵庵での最後の出逢いが思い出されてならない。

○ 小浜 牧人

長年斗病生活をした私はこの逆境の間を挫折することなく明るく心で過こし得たのは川柳と路郎先生のお蔭であった。

先生の格調の高い気品と香気に満ちた痛烈な詩魂に魅せられて一途に路郎川柳に傾注して斗病生活を送つたのであった。川柳は私にとって宗教でさえあった。先生はこんな私を時ある毎に励まし導いて下さった。先生の御言葉の一つ一つが私の川柳生活の支えとなり斗病から恢復への大きな力となつたのであった。路郎川柳は私には名医であり著効ある良薬であった。心の灯が消えた思ひである。最近私は体の調子が少し不調のため句会にも行けず作句からも遠のき不本意ながら先生にも疎遠をつづけていた。お目にかゝる機会を永遠に失つて仕舞つたことが悔やまれてならない。

○ 唐崎 専 翁

私は、若年の頃、新聞の川柳壇に投句した時分から、先生に師事

敬慕していたが、実際に警咳に接したのは、世界各地を一巡した旅日記を、或る新聞社で上梓単行本になったのを自慢そうに持参に及んだ時であった。御面接は容易であったが、私の著書を一読するや、先ず編集の拙さを批判され、何故發行前に、相談に来なかったか、と、半ば怒声鋭く罵倒なされた。朝日紙の紹介等で、贈主の各府県知事や市長連からの褒辞謝状に甘やかされていた鈍耳には、大喝と一瞬痛棒を喰った。神堂に於ける、無と空の心境に返り悟った。即座に私は「寺入りの日に叱られる（腕白）ヤンチャ者」の即吟拙句とともに以来、川雑社に新入志願したのであった。

先生は既刊の著書「川柳とは何か」の扉に私宛御署名と共に、先生の御名句

俺に似よ 俺に似るなと子をおもひ

を自筆して頂いた。先生の此句は川雑社中では、聞き古しいようが、私にとっては新鮮にして且つ、千古不朽の世紀の名句である。先生の風格たるや、至厳にして至情、富貴権門に陥わず屈せ

ず、和して流れぬ、清廉潔白の御性格と共に、全く、近代稀に見る、国宝的存在であったと私は思う。真に惜しい先生であった。

○ 前田 義 風

先生は戦後、北国柳壇の選者となられた。私は先生推薦で北国文芸賞の受賞をうけた。今迄の受賞者はそれを最後として投句をやめてしまいが、兄はそうした事のないうちに投句を続けてほしい。連続受賞も結構じゃないかと先生からけされいのお手紙を頂いた。ある時は、「何時も熱心に投句有難う。今後此の欄（北国柳壇）のレベルを下げない為にも続けてほしい。」との御便りをいただき、私の怠けようとする尻を叩いて下さった。そうして新聞社の目的である、購読者増のあくまでも愛読者文芸であって連続受賞はさけてほしい意志にそむいて私達の句を月々の課題吟でとり、雑詠で受賞作品を取上げて下さった。特に私の場合三十九年度は同月に両方の受賞が続いて批判を浴びた。

みかわす機会を逸した事が残念である。

○ 斉 藤 友 八

先生にと、かぬ声を抱いてねる 義 風

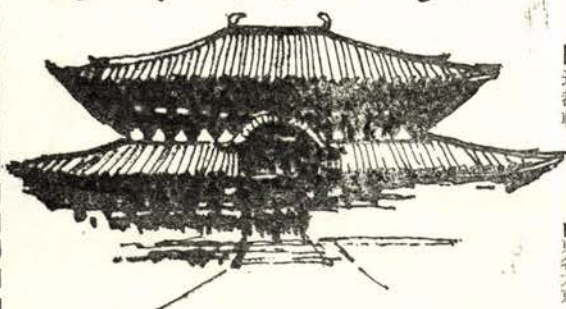
元来、私は俳句の方なのでありますが、友人の松本忠三氏から「川柳雑誌」を毎号見せて頂き、句会へも時々出席して拙い句を作っております。先年麻生先生に東野氏の御住所をお伺いした時、私が文楽人形を二十個余り持っており、家族で人形浄瑠璃の真似を致しております旨を申し上げましたところ、先生より「私も文楽の人形浄瑠璃が大好きなので、是非笠岡へ人形を見に行きたい」とのお便りを頂きました。その折には木山遠二、高木桃里、松本忠三の諸氏をもお招きして句会を催したいと楽しみに致しておりましたのに、遂にその機会を失いましたことは痛惜に堪えません。

尚先生の「文楽」の句に「死」とか、「臨終」などの文字を拝見して、すでに「死」ということを予感しておられましたことを思います時、更に涙新たるを覚えるものであります。

師にまみえ得ざりし木偶の悲しげに 如 牛

大仏と鹿とふるい歴史を物語る古社寺

奈良 大和



旅のガイド…名古屋・京都・大阪(上本町)から
近鉄特急が便利にご案内いたします

奈良名所遊覧観光バス……………

近鉄奈良駅前から毎日定期運転
奈良公園名所…3時間 470円 こども 400円
奈良・法隆寺…6時間 880円 “ 650円
法隆寺・飛鳥…6時間半 1050円 “ 775円
など8コース (いずれも片道料とも)

団体のご遊覧は 貸切観光バス……………

近鉄観光バス・奈良交通観光バス・奈良観光バス・京都近鉄観光バスの 各地をマスターしたベテラン運転手とガイドがおともいたします

お泊りは 奈良…奈良ホテル・月日亭・百楽荘
大阪…大阪都ホテル 京都…都ホテルなど近鉄系ホテル・旅館をはじめ 優秀旅館が名物料理を取りそろえてお待ちしております

▶奈良大和旅行のご相談は近鉄日本ツーリスト

東京八重洲	212 2201	神戸八幡通	22 5116
名古屋中央	57 2531	四国高松	2 7830
大阪上本町	771 8551	中国広島	61 6461
京都タワー	37 8655	九州福岡	75 1551

近鉄

○ 川端 東雲楼

七夕の夜によもや近こうとは思
っていられたかつたでしょう。

私も今年七十二才病弱ながら路郎
先生をあらゆる(川柳はとにかく)

く)目標でやって来ましたが、が
っくり参りまして今はたゞ涙で一

ばい。思ひおこせば故土井文蝶氏
臨終三日前お見舞になつて「ボク

の衣鉢を継ぐという君じやないか
氣をしっかりと頼むよ」とはげまし

れ万事を北川博士におたのみにな
つたご芳情、これが去年の七月二

十日なのに僅か一年後の同じ月に
この悲報!「生あるもの必ず没

す」などと簡単にかたづけ得べき
ものであらうか。先生の死!機関

誌の終刊!杖を取られた旨が荒野
原に投げ出されたも同様、茫然自

失とは私だけのことでございま
すまい。故先生直門の方々には最

の「みち」に向つて一日も早く発
足していたゞき幾百幾千数限りな

い弟子に孫弟子をしてひまご弟
子を路頭に迷わしめないようにご

指導たまわりまして聖霊の遺志に
そわせて頂きたいと存じます。

○ 吾郷玲人

松江で初めて路郎先生を拝顔し
ましたが、抱いていたイメージと

は程遠く若く逞しいお姿にビツク
リすると同時に、一寸話難いお方

だと思いました。その後十数年経
つて御津神社の本社句会で久し振

りにお目にかゝりました。然し以

前にお目にかゝった時とは又違ひ
柔和なお顔に満面笑みを浮べての

お話にすっかり打解けて松江や出
雲の柳界、柳人の消息を語り合っ

て戴きました。

それから幾年かの後BKのラジ
オ川柳に投句した事から先生のこ

健在、川柳雑誌のご隆盛を知り、
一年生に選んだ気で再び先生のこ

門を叩きました。然し私の熱の足
らなさからか、先生には幾度か、

句会への出席や励まし、時には鋭
くご叱責のお言葉迄戴きながらと

うく最後迄そのご期待やご恩に
報ゆる処なく終つてしまひ、まし

た事は、先生に對しまして深く深
く御詫び致す処でございます。

○ 行天 千代

路郎先生に初めてお目にかゝつ
てからまだ二年余りでございます

が、月に一度先生のお話を聞かせ
て戴いている内にだんぐ先生のお

人柄にひかれて行きました。そ
して川柳と言うもの、おもしろさ

が良くわかつて来しました。先生は
ちよつとお見かけした所いかめし

い様でそれで居て慈父の様な感じ
のお人、あれだけ有名なお方なの

に少しもいばらない先生……。

私はもつと早く先生にお目にかゝ
る機会が有れば良かったのにと今

更の様に悔まれてなりません。私
には十年越し病弱の夫が有りまし

て気苦労が絶えず、へたな句を作

つては自分の心を慰めて居りまし
た。家は薬店をしていて夜は割合

に忙しく月一度の句会にさえも思
う様に出席させてもらえず常に欠

席ばかりの思えば薄い御縁でした
が私は先生の末っ子弟子で有った

事を一生の誇りに思つて居りま
す。

冷風が大事な灯り消して行き

○ 佐野 ト占

省りみると昭和十五年春四月頃
かと思ひますが奈良県観光課へ御

越しになり、お目にかかったのが
初めての対面だった。翌年召集に

なる迄、奈良県内各地の史蹟巡り
のお供をして川柳を楽しまれる方

に沢山お目にかゝり教えられれると
ころがありました。

飛鳥地方へ御供した当時飛鳥鍋
をつき、奈良の若草山麓の旅

館では支那から帰つて来ておられ
た岩崎柳路さん達と昼酒禁止の際

でしたがヤカンに酒を入れて貰ひ
湯呑で呑んで頂きアラレ酒の菊屋

で無心をいつてはアラレ酒をわけ
て貰つたりした事がいつ迄も胸に

浮んで来る。今春、田中辰二先生を
見舞われた節も御老体同士が手を

かたく握られ二人共うれし涙を流
されました。そばで拝見していつ

何と云う美しい光景だろうかと思
ひました。私の身体のことにつ

いても色々御心配下さり、無理
をせずにもう少し身体をいたわる

様に御忠告を頂き六月か七月頃
来られたら来るからおしやつ

て空港迄お見送りしましたのが最
後になってしまいました。

柳志寸言



本多 柳志

◇かつて「俺が死んでも自由は死
せず」と叫んで息を引きとつた、

明治の政客があつた。路郎先生御
臨終の惱裡にあつたのは多くの門

下生や、後輩の事ではなかつたら
うか。先生は川柳ばんざいを高ら

かに叫んで瞑目された事と、恐れ
ながら拝察する。

◇川柳雑誌は正に路郎先生の、い
のちであつた。分身であつた。五

十年苦勞を共にした、雑誌を後に
残しては置けなかつたのであろ

う。川柳雑誌は廃刊せよ、との御
遺言は涙なしには聞けない。

◇河野一郎氏も先生と前後して亡
くなつた。政界の実力者としてよ

りは、不気味な感星として重きを
なした。それだけに味方もあつた

が敵も多かった。路郎先生には一
人の敵もいなかった。完成した詩

人の面目がある。

◇中島生々庵先生の弔辞は、ご葬
儀当日の圧巻であつた。其の文章

には一語の虚飾もなかつた。其の
声には真実があつた。正に不朽洞

会の声を完全に代表されていた。
路郎先生の後継者としての、今後

の活躍を期待したい。

◇柳志寸言はこれで終ります。二
年余にわたつて格別の配慮を戴い

た編集局と、愛読して戴いた多く
の柳友の皆様に深い敬意と謝意を

表します。有りがとうございまし
た。

ハンディな生ビール

アサヒ
スタイナー

1本 65円



「川柳雑誌」改題

「川柳塔」発刊!

四十有余年間親しまれてきた「川柳雑誌」が、九月号をもって終刊されることが全国柳人諸氏に知れわたり、これを受け継ぐ吟社と機関誌発行の声が各支部をはじめ全国からドッとわきあがりました。

ここで旧不朽洞会常任理事十名が急遽参集し、協議した結果をご報告申しあげますが、なにぶん緊急を要するため不朽洞会総会を開催できなかったことをご了承願います。

▼同人制度で社名を川柳塔社とする。
▼誌名は「川柳塔」とし(月刊六〇ページ・菊版)十月号より発刊、定価百二十円、送料六円

▼発行所は、大阪市南区巖谷仲之町二〇中島小児科内、川柳塔社
▼同人費は月額三百円とし、三か月分以上前納していただきます。
▼旧不朽洞会員はそのまま同人としてお迎えしますが、新しく同人

となる方には(旧不朽洞会員)二人以上の推薦を要します。
▼本誌の主なる内容
雑誌「川柳塔」選者は中島生々庵・北川春葉・若本多久志
雑誌「近作柳樽」選者は川村好郎・松江梅里・西尾葉・菊沢小松園
課題吟「一路集」は同人輪番制
婦人友の会「金泥集」は麻生霞乃選
「入門講座」は清水白柳氏担当
▼路郎賞創設
毎年七月七日を路郎忌として盛大に句会を開き、この席上で路郎賞を贈呈。この選考委員は同人中から七名の委員を選び、同人一年間の作品審査の結果により決定する。(本社句会や各地の句会からも選出)
▼新選者を七月句会の路郎忌に推薦
▼川柳塔社創立委員中島生々庵、北川春葉、西尾葉、松江梅里、川

村好郎、八木摩太郎、清水白柳、菊沢小松園、傍島静馬、小川恒明、若本多久志、大坂形水、橋高薫風、河相すすむ

▼当分の間は編集責任者に清水白柳氏、実務責任者に不二田一三夫
▼当分の間は経営責任者に中島生々庵、西尾葉、若本多久志、松江梅里、吉田圭井堂、大坂形水
▼近く総会を開き、規約や役員を決定する。

旧不朽洞会は「川柳雑誌」終刊と共に解散して会費等が清算されますが、引きつづき会員諸氏が「川柳塔」同人としてご協力くださるようお願い申し上げます。
なお、一般講読者皆様も「川柳雑誌」と同じようにご愛読たまわ

りますよう委員一同からもよろしくお願い申し上げます。
一部百二十円、送料六円、三か月前納送料共三百七十八円。半年分七百五十六円、一年分千四百四十円(送料負担)
▼詳細は「川柳塔」誌十月号をご覧ください。

原稿募集
雑誌 毎月十日/切
川柳塔 (十句) 旧不朽洞会員
近作柳樽 (十句) 一般講読者
課題吟
ムード (十句) 服部十九平選
円満 (十句) 伊藤茶仏選
立ち読み (十句) 小西雄々選
金泥集
(婦人友の会会員に限る)
艶 (十句) 麻生霞乃選
入門講座
研究題「善意」(五句)
清水白柳担当
ふるって応募下さい。

大阪市南区巖谷仲之町二〇
中島小児科
発行所

川柳塔社

電話大阪二七一三九八四番

ドイツ・マック社製

強力 ローヤル・ゼリー 製剤

活力を高める

強精と長生への天然の強壮効果

日本新薬株式会社

アピ

正式名 アピフォルティール

ROYAL
JELLY



本社 主催 路郎追悼句会

——しめやかな中に強固な決意の結集——

8月6日

午後6時

会場 千日前 自安寺

われらの恩師路郎先生逝いて恰度一十月、日増に寂寥を覚え、益々在りし日の恩師の姿を追慕する門下の集い、天も心してか、大阪は台風十五号も逃遁し、静けさにかえって、真に文字通りしめやかな「路郎追悼句会」が本社主催で盛大に繰り広げられた。

「いのちある句を創れ」の川維スピリット、「弟子に、孫弟子、ひまご弟子」と育くまれた不朽洞門下に、常に愛撫の手を、さしのべられた恩師の温容、温姿は、ただ残されたお写真一葉に残るのみ、いつもお座りになられた座席も空いた儘、主を待ち顔の淋しさを感じられた。あのテーブル、あの椅子、あのコップ一つにもこれが最後の句鑑場の遺品になろうとは……

本日の司会は西田柳宏子氏、先ず岸本水府先生に黙祷、続いて遺族路郎先生アト氏から「父との永年の交誼を感謝し、殊に酷暑父の葬送には多数のお見送り、香資、甲文、甲句に對し只管感謝している。これからは私も皆様の驢尾に附して大いに作句する」と述べられて降壇、続いて、路郎先生がかつてNHKから放送された「川柳生活五十年」のテープの音声に、在りし日の恩師が偲ばれてなつかしさがこみ上げた。次いで「路郎先生を

偲びて」と題して川村好郎氏の柳話があり、多大の感動を与えられた。後、席、兼題の披露に移り、佳句に耳を傾け或は、雲はるか、雲を通して先生も、お聞になって居られるであらう。西尾榮氏は「川柳雑誌」が終刊となっても同人誌として十月号より「川柳塔」と題し又堅き結束をと、万雷の拍手裡に賛同を得て降壇。いつもの不朽洞杯は、本日を以て川維句会はず・エンドとなるので今迄に二回獲得の玉造支部宮川珠笑氏の頭上に輝き、中島生々庵氏から表彰状とカップが手渡され、次いで多年川柳単行本刊行に路郎先生の補佐役として出版に尽したとの廉で、葭乃先生始め皆様の御配慮で、何等功ない私までが路郎先生ご揮毫の菓子皿一組家宝にせよと贈られ、中島生々庵氏から手渡され、思わぬ榮譽に小さくなるばかり、愈々ビリオドを打つ川柳雑誌社最後の句延に「いのちある句を創れ」の合唱も、いつもよりも大声に元氣よく握りこぶしが高く、上がるのだった。追悼句会の幕を閉じたのは、九時半を過ぎていた。

(摩)

出席者——アト、美房、静歩、圭水、八郎、圭井堂、昇、鶴馬、弓彦、古方、万的、瓢太、薫風、三司、柳宏子、好郎、史乗、摩太郎、榮、専翁、野迷路、花梢、

すみれ、言也、雄峯、白柳、よしを、文秋、雄声、章雅、白溪子、たつみ、狂二、潮花、与呂志、すすむ、清人、静波、双楽、呂久三、小松園、満潮、夢虹、操子、庸佑、一栄、金三、没食子、春菓、梅里、恒明、永断、舟遊、清生、一三天、トメ子、生々庵、形水、貴山、嘉矩、天樹、あいき、弥生、竹莊、女、不二也、敬太、みさ子、季賛、凡子、宏子、

兼題「煙草」 中島生々庵 選

未亡人になって煙草を喫いはじめ焦躁をみせまい煙草の火がつかず想い出があり煙草益捨てさせず爪に火の点くまで吸って煙管にし盛り場の乞食ピースしか喫わず口紅をわざわざつけて煙草臭れ彼訪えば先客があり紅煙草吸さしを女房が吸えばいいじましい上役の煙草ヘサツと出すライター交番で聞けば煙草屋で聞いてくれ重大犯に煙草すすめて気嫌とる黙否権煙草やつたりおどしたり紫煙のゆくえみつめて狐を愛すにせきつは先ず煙草屋で試みされる菊の紋の煙草を今も母は持ちだらり帯盗み煙草を叱られる合格をしたら煙草を吸い始め手がこげる程に喫うて貯めていせんせいを吸うてはるのが社長さんせき止めをのんでたばこはめられず自白する前にタバコをくれと云う肺ガンの亡兄へ煙草を入れてやり上役が留守だと分る煙草の輪煙草までやめたと金をかりに来る禁煙をすすめぬ医者とのりかえる

松太郎 凡子 圭井堂 雄声 白溪子 白柳 多久志 梅里 雄声 好郎 榮 梅里 摩太郎 阿茶 永断 文秋 狂二 操子 一三天 形水 呂久三 清人

ゼイタクなすいかたやなとモクひろい

恒明

兼題「旅」

清水白柳

選

旅好きのあたは絵葉書流に撮り旅に出りややはり騒音なつかしい措しみなく妻をいたわる旅の宿サボテンの青き雨の旅に居る病友へ旅僧次に怠らず言也空蟬のごと脱ぎ捨てて旅に出る母親は旅先の風景じとり尾道の旅石段に師を思う集金の旅故里は車窓で見一人旅フィルム半分程のこり旅の夜の女アンマの赤い爪旅に出し仲間肩の荷をおろし山の犠牲を地酒で聞くも旅のもの旅馴れていまだ富士の晴を見ずロケの旅ママさん女優乳が張り一日の旅へ洋行ほどに持ち旅便り親孝行のことにふれ旅便り酒のうまさも書き添える一人旅いづれは行くと知りながら古本屋漁るも旅の夜のプラン旅なれた人が座ると目をつむりこつ／＼と貯めて恐ろしく空の旅汽笛もう旅の心にしてくれる旅の雨ふやけるほど湯にたれる東京で合流派手な旅になり道を問う訛りへ旅の人と知り商用の旅駅前で頭かり台風を向かいに行つたような旅帰る米ぬ旅と知りつ今日も待ちあれこれと書き残し妻旅に立ち水飲みな寝冷えするなど旅に出し静かに燃えているはなればなれの旅仮縫いを急かした服で宵に発ち

旅 松太郎 静馬 史乗 言也 あき子 与呂志 多久志 文秋 雄峯 花梢 庸佑 万的 三司 清人 どんたく 榮 多久志 喜仙 春菓 雄峯 圭井堂 恒明 天樹 白溪子 章雅 たつみ 凡子 瓢太 よしを 章子

待つことに馴れローカルの旅にいる
傘さげていて旅人のけちくさく
気休めの旅がみやげで気が疲れ
ぜいたくな旅一泊で母は飽き
一人旅家で読まれぬ本を持ち
兼題「盃」 北川春果 選
返盃の仕方からして出世型
返盃がつづく仲居の強い酒
猪口伏せて女覚悟の目を閉じる
盃はうす手がよいと呑み習い
盃がボスの処へばかり行く
盃は胡麻摺る心あわれがり
立入って聞く盃へついでやり
新入社坐り直して盃を受け
盃も重し商談まなならず
まねだけの盃はして座を持たし
金盃が廻り元且らしくなり
盃が又振り出しに戻す酒
口紅をつけて盃戻って来
隣りまで来て盃めうター
庭貫めて盃遠慮がちに干し
献盃も一通りして席をあけ
盃は立派二級酒ついでくれ
飲み足らぬ奴がお流れ受けにい
盃を伏せお願いの筋に入り
盃のピッチが早い慰安会
盃をためてあっさり酒豪老い
商魂たくましく盃をさしながら
盃がコップ酒になる日の再会
盃をくすねてかえるコレクション
日の丸の浮く盃で飲む地酒
盃をおしただいて措けられず
左手でダメと右手で受ける盃
盃の土産に父の眼がわらい
盃をかさねて左遷酔うてこず
清生 一十 弥生 竹荘 松太朗 凡子 呂久三 雄声 阿茶 雄峰 どんたく 圭水 形水 中性尼 永断 圭井堂 静馬 白溪子 言也 圭水 静馬 多志 柳宏子 舟遊 満潮 弥生 梅里 三司 清生 弓彦 白柳 形水

故郷はよし盃ゆれる程に酔い
再婚の盃なのに手がふるえ
盃をかえれば酒も味かわる
兼題「ひとすじ」 松江梅里 選
川柳一筋命をかけた師を誇り
ひとすじな恋心中もしかねまじ
ひとすじのバツグンな傍が悔い
ひとすじの葉をもつかむ程あえぎ
ひとすじの煙が野辺の別れなり
ひとすじの芸報われる文化財
一筋に自信過剰のままで老い
ひとすじの髪が決め手で足がつき
ひとすじの芸が女を強くする
ひとすじに勤め自由を知らず老け
ひとすじにやる気へ雑音多過ぎる
失窓が芸ひとすじに打ちこませ
ひとすじに生き抜く自信持つマダム
芸一すじ妻は貧苦を口にせず
求婚へ槍一筋をもち出され
定年へひとすじ道で来た早さ
ひとすじに押せ押せで押し通し
何べんも切れそな一筋もちこたえ
因習の殻も背負うて芸の虫
その女ひとすじ縄で陥ちぬなり
ひとすじに思いつめられこわくなり
縁遠くベンひとすじに生きる女史
ひとすじのきれつ女に溝が出来
ひとすじの綱に干して舟世帯
ひとすじに想っていたはこらだけ
一筋のうちの三分は意地で生き
ひとすじの愛惜しなく生きつづ
女優離婚芸ひとすじにとみなは云う
名人のただひとすじに生きた哥え
一筋の泡に託した熱帯魚
君一筋と云える若さがうらやまし
史葉 美房 春巢 あいき 松太朗 旅風 みさ子 舟遊 天樹 生々庵 よしを 与呂志 真砂 静馬 一栄 竹荘 好郎 阿茶 弥生 柳宏子 阿茶 真砂 多志 一三天 清人 舟遊 白溪子 弓彦 美房 与呂志 一三天 天樹 美房 形水

光芒ひとすじ空一ぱいに巨星墜つ
ひとすじの望みに生きるのも女
ひとすじの蔓に西瓜の大小
ひとすじに道を究めて世にうとし
ひとすじに絶る誠意に動かされ
兼題「遺業」 菊沢小松園 選
二代目は父の遺業を重荷がり
算盤にあわぬ遺業をつがされる
朝の美しさ遺業をついで知り
遺業継ぐ娘に養子来てがなし
遺業つく嫡子の頭脳進み過ぎ
意見合わぬ父の遺業を継がされる
遺業なつてかげの苦勞は忘れられ
遺業成り内助の妻は忘れられ
中之島公会堂
大遺業の鍵は抱かれた児が渡し
子沢山遺業継ぐのは一人だけ
にっこりと父の遺業へ向いて立ち
人間国宝の遺業なにを継ぐべきや
その遺業の後を養子が来てつがし
一代で築く遺業を子は継がず
遺業もう時世に合わず天を見る
兼題「聞く」 若柳潮花 選
都合よいとこだけ聞いてる床柱
子が聞いているので喧嘩やめにする
カーテンを閉めて聴きだけは聞き
返事してはいそう弔文きく涙
冗談を本気になって聞きかえし
聞いてないふりで廊下をやつとす
道聞けばあごをシャクツク呉れただけ
お元氣な頃のお声に涙ぐみ
毒舌を汗を拭きふきこらえてる
聞かせてはならぬ人の耳に入れ
盗み聞きこつちへ来てはもう喋り
内聞に願う菓子折重う提げ
専翁 清生 小松園 静馬 梅里 トメ子 恒明 清生 静馬 専翁 季賛 たつみ 静馬 摩天郎 文秋 潮花 一三天 摩天郎 梅里 小松園 柳宏子 文秋 永断 操子 たつみ 操子 よしを 圭井堂 静馬 庸佑 狂二 昇

聞えんようになつて名人らしくなり
子供から聞くに絶えざる事も聞き
きけば聞くほど毒舌筋通る
雨を聞く姿石仏眼が細く
うっかりと聞いて一桁置き違い
師の声は尚生ある如しタイプ聞く
妻の愚痴聞きつつ一升空にする
声紋をとられタイプへかしこまり
聞く丈けは上手に聞いて貸もせず
ベニ板一枚つつ抜けのグライバシー
耳に口よせて嬉しいことを聞き
山の犠牲を主に聞いている地酒
本人が噂いけばあんあとで聞き
聞き上手うまく相手の肚を読み
聞き耳を立てて女の齡を聞く
聞くだけは聞くが勞使は折れあわず
脱線の話はみんな聞いており
耳たよりないもんやなと思ふ日も
早耳のまたすかたんに踊らされ
きいているのと妻とおこり出し
聞く内に泣き事だから座をはずし
名人の同じ落語を聞きあきず
本心をきくまでもないそふりなり
聞いておらないと言訳つきはなし
古方 摩天郎 舟遊 万的 形水 瓢太 与呂志 一三天 トメ子 満潮 白溪子 万的 庸佑 雄声 小松園 梅里 清人 古方 静馬 操子 舟遊 言也 恒明 潮花

宴会・出張パーティ・折詰弁当

梅里ノ店

大萬

料亭 阿倍野区松崎町三ノ一〇

TEL (二二) 三九三五番

(二二) 七七八二番

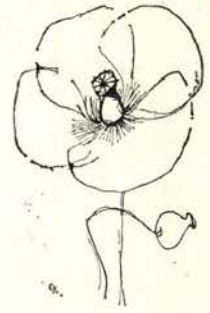
脂の店 アベノ橋近地下食通街

TEL (六三) 〇一四七番

串の店 南区豊屋町三ツ寺センター

TEL (二二) 九一八四番

柳樽室



★もう秋がそこに来ていると云うのにまだまだ暑い日が続く、父（路郎）が亡くなったからあまりにもあわただしい毎日であったので、父の死を考える暇さえなかった。父は病の床から色々な仕事に手をのばしていたので、何処からどう始末をつけたらよいのか、不肖の子そろいの私達には戸惑いすることばかりである。父の健康状態から云っても、せめて月刊雑誌の発刊からもう少し早く手を引いて欲しかったが、それも今となつては却って思ひのまゝの人生を送ってくれたことに満足したいと思う。★通夜の日、狭い処で煽風機にあたっていたためか、足腰が痛み動けなくなった私はついに葬儀にも出られず、不朽洞に居候している。幸い手と口は達者なので編集の手伝いをさせていた。処が今度は母が臥てしまった。永い間の昼も夜もの無理が祟ったのかもしれない。ベンが持てないので失礼する。★本号の表紙は田村孝之助先生が、お忙しい中から色紙をお供へして下さい。ご好意、本当にうれしく、感謝申し上げます。★川柳初編研究、川柳太平記、明治川柳と風俗、いづれも本号には掲載出来なかつた。稿中は申訳ないが、引き続き

「川柳塔」誌に御執筆をお願いするつもりである。その節はご愛読をお願いする。★八月十五日の課題「一路集」は十月月号発表の予定であつたため、九月月号で廃刊の本誌には掲載出来ないこととなつた。廃刊のことも既にご承知の方も多く、応募も少ないと見られたので、折角のご投句であるし、出来るだけ発表したいと思ひ、勝手ながら雑誌として掲載させて頂いた。尚編集が済んだ後で投句があつたので、これは「川柳塔」誌へ発表していただく。取込中のことで方針がはつきりせず、統一した処置が出来なかつたがご諒承願いたい。「川柳塔」は同人誌になるが雑誌の内容はすべて「川柳雑誌」を継承すること、なるので、今まで通りのご寄稿、ご投句をお願いする。★柳人諸兄から多数のご弔文、ご弔句のご寄稿をいただき深謝、とても掲載し切れないので取捨について不行届きの点はご容赦下さい。葬儀に際していただいたご弔辞は記録にもなることなので、掲載させて頂いたことが、スペースの都合で葬儀委員長の方に控らせていただいた。大阪府知事、和歌山市々長外、弔電をいただいた方々のご芳名も多数のため記載出来なかつた。色々不備な点が多いがこれもお許し願いたい。★川柳雑誌社の最終刊行物「れもん」が新刊された。好評で各地から礼賛のお言葉をいただいている。ご一読をおすめする。★全国から多数のお悔状をいただいたが、今はたゞ最終号を出すことだけで

せい一ぱいの状態なので誌上を借りてお礼を申上げる。★永い間親しんでいた「川柳雑誌」の名称ともお別れすること、なるが、いち早く来月号から「川柳塔」が発表されるので「川柳雑誌」同様のご支援をお願いする次第である。（梨里）

☆川柳支部句会 九月

☆玉造句会・10日（金）六時半、題、天災
・おやつ・無理、所、市電玉造南百米大阪
信用金庫☆宇部句会・12日（日）一時、題、
彫刻・折詰・口紅・辻斬り、所、東区西
ノ宮出雲大社宇部分社☆阿倍野句会・20
（月）六時、題、本性・発起人・同じ・ボ
ーリング、所、阿倍野区朽崎町三ノ一〇割
京大万☆明和研究句会・19日（日）一時、
題、髭・マッチ・終、所、阪神鳴尾駅東南
二百米鳴尾公民館☆南海電鉄句会16日（木）
六時、題、合理化・ねばり・紙コップ、
所、難波高架下親和クラブ

Printed in Japan

（禁転載）

川柳雑誌

第四十号

定価 一二〇円

（送料六円）

B列5号 毎月一回一日発行

昭和四十年 八月 廿五日印刷
昭和四十年 九月 一日 発行

大阪市住吉区西五丁目二五番地
編集兼発行 行印刷人 麻生幸二郎
大阪市住吉区西五丁目二五番地

発行所 川柳雑誌社

電話大阪（六）七一六〇八一
郵務口座大阪七五〇五〇番

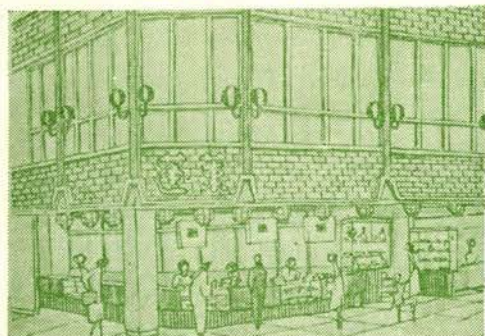
元気1本 ヘルタスバーモント

大日本製薬

疲れたとき
だるいとき
仕事が終わった後



豚饅・焼売



広 東 料 理

蓬 萊

大 阪 な ん ば

TEL (641) 0551~2

高島屋店・そごう店・天満京阪ストアー店



中外製薬

疲れに



蜂蜜とリンゴ酢を常用して、みずみずしい生命力を保つといわれる「バーモント長命法」を応用した大型「内服スタミナ液」です。ゴクンノゴクンノと1本やれば解毒に、疲労回復に、二日酔にまた栄養補給にも好適です。<1本 100ml角瓶入>

グロモント

(グロンサン・バーモント)

倉敷紡績



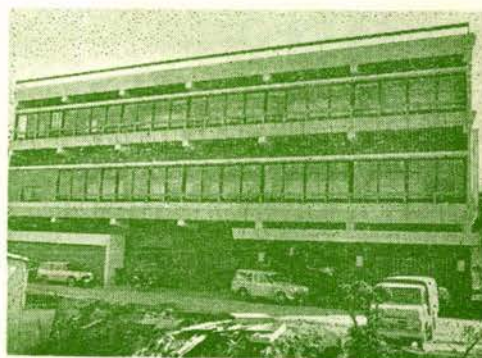
! 洗う...
乾く...

すぐ着られる

京レテトロシ 65%
高 級 綿 35%

クラブ テロン シャツ

姉妹品 クラブテロンブラウス



国立公園 奥新和歌浦・雑賀崎

風光明媚な海岸美を誇る
国際観光旅館

う お ま た ろ
魚 又 楼

TEL 和歌山 ④ 0431・1186



えらばれ

みがきぬかれた 灘の酒

超特撰 日本盛



超特撰 (化粧ケース入) 一、ハリットル詰・一、三〇〇円

清酒

日本盛

ニホンサカリ

灘 西宮酒造 醸



(純正優秀医薬品)をつくる…田辺製薬



細胞はお元気?



弘田三枝子

健康は《元気な細胞》から

アスパラエル

効かそう?

グイグイと働き、休日にも朝から戸外へとび出せる
日光に目がチカチカしない

こんな方は、きっと細胞が元気

細胞の働きが順調なのです。

アスパラ・Lは、筋肉・心臓

肝臓などの細胞に、直接働き

かける活性アミノ酸剤。毎日

のんで、常用効果をどうぞ！



活性アミノ酸製剤
ビタミンB12強化
50錠・100錠・250錠



お薬は
このマークの
薬局・薬店で

おいしい内服液

アスパラC 100ml

新発売 アスパラ目薬 15ml